

オマハ族

ALICE C. FLETCHER and FRANCIS LA FLESCHÉ

I

地域 : 言語学的な結びつき

オマハ族の人たちは、ネブラスカ州に住んでいたのですが、地域は、**Burt, Cuming** そして、**Thurston** 郡辺りで、彼等の名前の由来となった町の北、約 80 マイルくらいのところでは、

オマハ族は、これまで一度も合衆国を相手に戦いをしたこともありませんし、彼等は、白人達がこの地域に入ってきたときに彼等が住んでいたネブラスカ州に今でも住んでいる唯一の部族なのです。

1882 年に、議会が、彼等が合衆国政府に対して広大な狩猟地を譲渡した、1854 年に彼等の保護居留区として選んだ地域に、すべてのオマハ族の男、女、そして、子供達が、ある決まった広さの土地を認めるという条項を成立させた。オマハ族は、彼等の生活の基盤を、農民として、機械技術者、あるいは、商人などとして、彼等自身が懸命に働くことに依存していた；1882 年の条項までに、彼らは、市民法や刑法など、ネブラスカ州の法律のもとに管轄されていた。彼等の伝統的な部族の組織は、すっかり変わってしまった環境、バッファローが居なくなってしまったこと、そして、たちまちのうちに白人市民が増大したことなどにより、すでになくなっていた。血族関係の人たちと、なおも自分たちの子供に、その子供が入っていくといわれた男達の集団を象徴しているような名前をつけていた人々との間の部族外結婚が行われる以外には、古い伝統で損なわれずに残っているものは何もなかった。彼等は、彼等の社会的な特徴でもあったことから、そして、彼等の歌や激しいダンス、これらは、オマハ族がとても繁栄し、そして、独自の自治をもった部族であった頃を思い出させてくれるものであったが、こうしたものから与えられる喜びを甘受できるような、極々僅かの社会組織というものが残ってはいたが、しかし、それらの影響は、殆ど影を潜め始めていた。

1884 年の 6 月には、オマハ族の人口、1,179 名であった。そのつぎに、部族の者達に土地の割り当てが実施された。人口の内容は、次のとおりであった。

	男子	女子
成人	305	338
18 歳以下	<u>259</u>	<u>277</u>
合計	564	615

女性が男性を上回る数 51、このうち、33 人は成人、18 人は未成人

家族数 246
子供のいない家族 41
83993° -27 ETH-11-3

死んだ人のことはあまり話したがらないので、実際には、どれだけの子供が生まれていたかを知ろうというのは、現実には無理であった。

次のまとめは、年齢別の男女の数の比較を示したものである。

	男性	女性
3 歳以下	87	82
3 歳 ~ 7 歳	69	82
3 歳 ~ 17 歳	103	113
17 歳 ~ 40 歳	192	232
40 歳 ~ 55 歳	72	55
55 歳以上	41	51

17 歳から 40 歳までの歳の人たちの著しい男女間の数の開きは、殆どの男達がこの年齢の間は、狩猟や戦闘といった厳しい出来事にかかわっていたことによるものであろう。こうした男達の役割は、この調査が行われた 8 年ほど前の 1876 年までなくなることがなかったもので、こうした男達の一生についてまわる仕事の影響が、上の表のなかに表れている。

彼等が、初期の旅行者、取引商人、そして、入植者達を通して白人たちに知られるようになる前の何世紀もの間、メキシコの北に位置している北アメリカ先住民の人たちは、東から西へ、西から東へと、或いは、北から南へ、南から北へと大陸を行き来していた。^a こうした古代の行き交った道のあとは、地図にも示されているように、後から入ってきた人たちの動きで、かき消されてしまったので、そうした足跡をもう一度見える形にし、彼等の歴史を理解することが、人類学者たちの為すべき仕事なのでもある。一方で、当時の地図のうえに示されていた様々なものが、だんだんなくなっていくような沢山の出来事は、この大陸に住んでいた先住民の人たちの文化の発展に触れて、一般化していくことを容認するのでしょうか、最近の研究者達の認識の中でも見られているように、内陸部の水系と、二つの海の広大な海岸線に流れ出す川の体系が、ある場所で栄えた文明が他の場所に広まっていくために、重要な役割と果たしたということは、決して考えられなくもないことだと思われる。

オマハ族は、スー語族に属する人たちです。地図でみると、この語族のある一部の流れの人たちは、ロッキー山脈の東の山麓の近くに、北緯 53 度線あたりまで進出しているが、

a 北部メキシコ地域のアメリカインディアン言語系譜の地図(アメリカ民族局、年報第 7 巻、ならびに、速報 10 号、第一章)を参照していただきたい。ここには、彼等が白人達に知られるようになってからの、幾つかの言語系が話されていたおおよその区域が示されている。

大方の主だった人たちは、ミシシッピーのずっと西のかなたに移動してしまっていた。また、極僅かではあるが、部族からはみ出たスー族の集団もあった—こうした人たちは、取り残されたのであろう—たとえば、アパラチア山脈の東側のなだらかな斜面の地域に住んでいた集団や、大西洋の海岸線台地のほうに広がっていった人たち、さらには、無理に南西の方に追い込まれた彼等の血縁関係の集団から、分かれていったように思われるメキシコのガルフ湾の北の海岸に落ちていた集団などである。物語は、地図を使って両方の説明を告げており、そして、この語族に属していた沢山の部族の伝統的なものにより説明されている。こうした伝統的なものすべてが、長い歴史の間に東から西に移動していったことを物語っている。この語族の発生地は、古代アメリカ人の種族の発生をいまでも包み込んでいる神秘的なかに隠されたままである；しかしながら、多分、それは、アパラチア山脈のどこかであったであろう、そして、彼等のなかに伝わるありとあらゆる伝説が、人々は自分たちの住んでいる村には偉大なる池があると考えていたということを伝えている。この池とは、おそらく、地図の上に示されている場所からも、スー語族の子孫達がバージニア、ノース・カロライナ、そして、サウス・カロライナ州地域の山麓のなかに、白人達が入りこんで来た後まで、住んでいたということからも、大西洋のことを指しているものと思われる。

スー語族の人たちがずっと西のほうに移住していく間に、この集団は、ある者たちはほかの集団よりもはやくなるなどして、次第に分散してしまったのではないと思われる。そして、彼等生活のやり方を、彼等の生活環境に対して自分たちの習慣的な出来事をそこに適合していくような形で定着し、さらには、こうした移住の途中で他の語族の人たちとも接触をし、それにより、彼らの文化も影響を与えられていた。最後の 2、ないし、3 百年間となるまで一緒に生活をしていた集団は、今、オマハ族、ポンカ族、オセージ族、カンザ族、そして、クアポウ族として知られているきわめて同じような言葉を話す五つの部族から構成されていたようである。いまなお、彼等の言語は、明確に違いのある方言として区別することは難しい。また、言語的な根拠から、おそらく似たような関係にあった部族の、スー語族のほかの集団がいる。こうした集団の幾つかは、彼等が荒野を放浪しているなかで出会ったときに自分たちの血族関係と融合することを防ぐような、彼等に独特な言語の特徴を作り上げていたようだ。その証拠となる、まず最初のは、アイオワ族とオマハ族が、部族で一緒になることなしに、お互いに集って、そして、旅をしていたことである。かれらは、ともに同じ言語族に属してはいたが、アイオワ族の方言は、オマハ族のものには、現実には理解できなかった。こうした部族の最終的な分離は、ごく最近の 2 世紀の間におきた。

オマハ族がその 1 つであるが、この五つの同語族は、言語の中だけでなく、部族の組織であるとか、宗教的な儀式の中においても お互いにつよく似たようなものを持っていた。彼等の同語族の間に存在していた共通の認識と言う面からオマハ族を解説することが、この非常に大きな言語学的集団により提示された問題の多くを解くための鍵になるものと期

待され、こうした部族のことだけでなく、スー語を話すほかの部族のことについてもまた、比較研究をすることを積極的に進めるために提案されている。

部族の考え方；OMAHA という名前

Uki'te、これは、部族を指す語ですが、この言葉は二つの意味を持っています：動詞としては、“闘う”と言うことを意味し、名詞として使われるときには、“部族”という意味を指しています。たぶん、名詞は、動詞の意味から来ており；少なくとも、それは、部族を形成する基本となったオマハ族の概念に手がかりとなるヒントを投げかけています。動詞の形は、外部の敵に対して“闘うこと”を意味しており、名誉とか、栄誉を手にする事が出来るような戦いのなかで働くことなのです。ここでいうような戦いをしたひとは、彼らに攻撃してくる人に対して、身を挺してその前に立ちはだかる必要があります。この *uki'te* という言葉は、素手や石を投げたりし合う、部族の中での喧嘩には決して使われてはいない；そういう状況のときには、*niu'*, *nage'*, *ki'na* などといった言葉が使われ、たとえ、そこで勝ったにしても、何の栄誉も与えられなかった。オマハの言葉の中では、唯一、*Uki'te* という言葉だけが、男同士の間の“戦う”(*uki'te*)という意味を持っていた。部族の中の戦士たちは、外部からの攻撃に対してだけ闘う闘士であったのだ；彼らは、自分たちの仲間、彼らを頼りその勇敢さにより守られている人々を守るために、いつも準備をしていなければならなかった。“部族”という意味での、*Uki'te* という言葉は、オマハ族にとっては、ひとつのまとまりとしての共同体である部族を守るためのものとして理解されていた共通の義務感というものを表している。

記述的な名前としてのオマハ族（*umon'hoⁿ* “流れに逆らって”、或いは、“川の上流”という意味）というのは、1541 年以前の人たちを指すときに限られていた。この年に、De Soto 族の人たちが、クアボウ族；*quapaw*、或いは、*uga'xpa* 族、これは、“川の流れとともに、”或いは、“川の下流”という意味で、*umon'hoⁿ* とか、**Omaha** という言葉と補完関係にあるものであるが、この人たちと出会った。これらの両方の名前が、彼等の分かれた集団、一方は川の上流に行き、そして、ほかの者達は、川を下っていった、夫々の部族によって使われている。

この分離がどのような形で進んでいったかということについては、二つの説がある。その 1 つは、—

人々は、*Uha'i ke river^a* を下流に向かって移動していた。そして、彼等は、川幅の広い川のところに来ると、毛皮の船(fig. 1 参照) を作り、これで、川を渡った。そして、彼等が川をわたっているときに、流れが急になった。オマハ族とアイオワ族は、安全に川を渡りきったが、クワボウ族は川に流され、とうとう、前の世紀の最後になるまで再びその姿を見ることはできなかった。アイオワ族は上陸地点をみつけ、その砂地で彼等はキャンプを張った。強い風が吹き、彼等の上に砂が舞い、彼等の顔が灰色となった。こんなことから、彼等は、自分たちのことを *Pa'xude*、“灰色の頭”と呼び、それ以来、オマハ族は彼等をその名前と呼ぶようになった。そのアイオワ族は、オマハ族と一緒に、ミシシッピー川を、“**Raccoon 川**” — 多分、Des Moines 川ではないかと思われるが、と呼ばれていた川のところまで遡ってゆき、こんどは、その川の源流のところまで辿っていき、こうして彼等は、**Pipestone** の石切り場の辺りにやって来た。

a *Uha'i ke* “彼らが下ってきた川；”、今もオマハ族の人たちがオハイオ川のことを呼ぶ時にこの名前を使っている

オマハ族とクアポウ族が別れていったという他の言い伝えは、—

非常に大きな川に出くわすと、人々は葡萄の木をつるを使ってロープを作った。それを東側の土手に結びつけ、もう一方の端を、泳ぎの達者なものが持って、川を渡って行き、西の土手に固定した。この葡萄の蔦で出来たロープに捕まり、人々は川を渡っていった。ところが、彼等の集団の半分、この中に、オマハ族とアイオア族が含まれていたというわけであるが、その人たちが渡ったところで、沢山の人の残してこの蔦のロープが切れてしまった。

このここに残された人たちが、クアポウ族の人たちだった。この川を横切ったときは、霧の深い朝で、ここに残された人たちは、西の土手に渡った人たちも自分たちと一緒に川に沿って下流に移動してくるものと思ひ込み、自分たちは東側の土手を下流に向かって移動して行き、そして、とうとう両方の集団ともにお互いを見失ってしまった。

もし、オマハ族の人が、知らない人に呼び止められ、そして、何処の部族のものかと聞かれたときには、或いは、誰か見分けが付かないような暗闇のなかで、同じような質問をされたときには、彼は、こんな風に答えるだろう。 *Umo'hon bthi' ha*, “私は、オマハ族の人間だ” と。また、“あなたは、どなた様ですか？” と、尋ねられれば、彼は、：“私は、[なになにと言う名前で]、名前を言って、何某の息子、もしくは、甥です。” と返事をするでしょう。

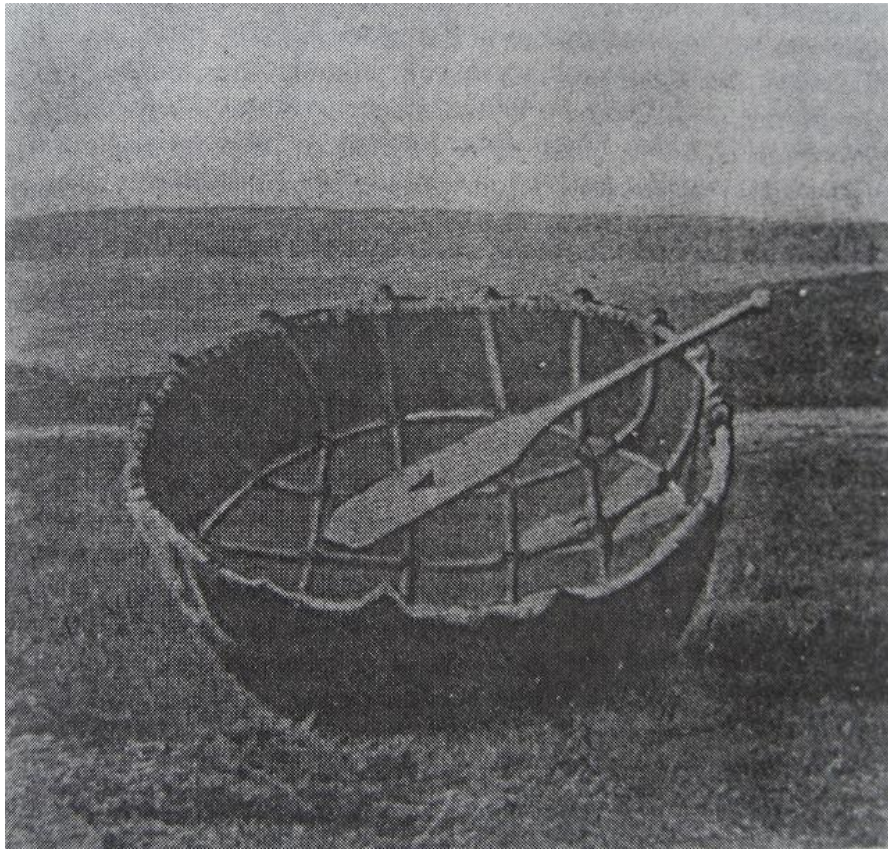


Fig. 1. 毛皮製のボート、もしくは、“bull-boat”

そして、もし、彼の属している部族の名前を尋ねられたときには、“オマハ族です。”と言うでしょう。もし、“あなた方は、どんな方達ですか？”と聞かれれば、“私は、何某の息子、或いは、甥で、何某の子供達が沢山います。”と返事をするでしょう。

若い者達が二つに、あるいは、敵味方に分かれて、野球のようなゲームをするようなときには、そして、だれかが、“どちらのチームに入るのか？”と、聞かれれば、彼は、*The'giha bthi' ha* “私は、こちら側、とか、こっちのグループにはいる。”というだろう。The 'giha というのは、“こちら側”という意味をもっている言葉で、こうした、ゲームのなかで、サイドとか、グループを指すときにだけ用いられる言葉である。いずれにせよ、この言葉は、部族的な、重要な意味のある言葉でもなければ、オマハ族そのものを指したり、或いは、彼等の住んでいる場所を示すものでもなかった。

五つの同語系の部族 — 前時代的集団の証拠

オマハ族、ポンカ族、オセージ族、カンザ族 そして、クアポウ族に共通の伝統が、彼等がかつては 1 つの集団の人たちであったことを物語っている。彼等の話す言葉が、この伝統の真実の証拠であり、そして、彼等の部族社会の類似性というものが、その何よりの証拠を提供している。親組織というものが、生活の様式と、集団が分かれて行き、独立した部族として組織を形成するときに、彼等は家族の特徴を保持するというこの人たちの考えにとっても強い影響を与えていたと思われる；こうした同語系の部族のすべてが、ある同じような特徴を持っていることからこのようなことが言える。これらの部族はすべて、族外結婚をし、父方を通してだけ家系を残していくような血族集団に分かれていた。夫々の集団や血族は、夫々独自の名前と、個々人の名前の一組を持つており、その中の 1 つは、血族のなかで生まれた子どもすべてに与えられていた。こうした個人の名前は、何処の家系、もしくは、属す血族集団を現す象徴となるものか、或いは、その象徴するものに適用される儀式、これは、特に血族ごとに求められる独特なものであるが、このいずれかを表しているものであった。

オマハ族、ポンカ族、オセージ族、カンザ族、そして、クアポウ族に残っていた伝統によれば、彼らが一度その仲間になった親組織からの離れていくことは、彼等が後に別々になって言ったことと同じように、一致団結して起こってというようなものではなかった；こうしたものは、たまたまおきた中にそのきっかけによるもの、すでにオマハ族や、クアポウ族について述べてきたような状況、あるいは、前述のような野心的な酋長による反目であったり、獲物を追いかけているときのその時の状況などがそのきっかけになっていた。Wazha'zhe、もしくは、オセージ族のある伝統が、彼らは狩猟についての諍いが原因でポンカ族から分離していったということを物語っている。ポンカ族の Wazha'zhe の血族集団は、“分かれていったのは、獲物に関しての諍いによるものであった。われわれを残していった者達は、行方不明になり、そして、今日、われわれは、彼らのことをわれわれの名前

Wazha'zhe のもととなった非常に大きな部族であったと聞いている。” というような、似たような物語を持っている。

こうした伝統は、何かある理由で、1つの集団が分離していくときには、そこにいるすべての人たちが必ずしもひとつの血族集団に属しているのではなく、親組織のなかの幾つかの男達の集団に属していて、この集団が、ほかの集団と明らかな際立った部族として 1つの組織的なものになると、この男達の血縁関係にあるものたちは、彼等独自の名前で認められるようになり、そして、共通の宗教的儀式をとりおこない、新しい部族というかたちで、1つの血族集団を形成していった。こうした慣習が、ここの同語系の部族の間の状況により確認されている。

たとえば、オマハ族、オセージ族、カンザ族、そして、クアポウ族の間では、夫々の部族に、亀集団という集団が、準血族集団として存在しており、その団員は、部族の中で、いろいろな場面で執り行われる亀の儀式の遂行者の役割を担っている。

もう一度、述べるが、オマハ族、オセージ族、カンザ族、そして、クアポウ族の間では、カンザ族、もしくは、ウィンド族と呼ばれる人たちが、夫々の部族のなかに血族集団を形づくっていて、その夫々が部族のなかで風に関係する儀式を執り行っている。

オマハ族、オセージ族、カンザ族、そして、クアポウ族の間では、夫々の部族のなかに Mon'thinkagaxe (“大地の創造主”) に似たような血族集団が存在している。

Nu'xe あるいは、 Ice と呼ばれている集団がポンカ族にあり、オセージ族、カンザ族、そして、クアポウ族のなかの準集団のなかにもそのような名前のものが見られる。

ポンカ族がかつては、オマハ族の 1つの集団であって、それが、本体が分離し、そして、彼らがポンカ族と言う形の準独立部族となり、はっきりと区別されるようになったときに、ポンカ族という部族を形成していったという話がある。このことはおそらく確かなことであろう。しかしながら、最初のころは、少なくとも、ポンカ族のある者たちは、彼等が親組織から分かれていったとき、そして、オセージ族、カンザ族、そして、クアポウ族と一緒に生活していたものと思われ、そして、そうした名前の血族集団を、先にも述べたように、同語系の夫々の部族に見出すことができることから、これらの集団がはっきりとした部族の形になったときに、ポンカ族の血族集団が一緒になって、1つのポンカ族を形成していったようである。

こうした部族の前段階での組織と関係している別の面からの証拠が、個々人の名前のなかにも見ることができる。それらの幾つかには、もはや部族の間ではみることのできなくなってしまうが、しかし、同語系部族のどこかでまだ実施されている、そんな宗教儀式的なかに名前が残っており、そうした宗教儀式に関係したものがある。— こうしたことは、間違いなく、個人的な名前が今も見つけることができるその宗教的な儀式が、夫々の部族の間に知られていて、そして、それを見ることが出来たということを示している。たとえば、オマハ族の間の In'shta'cu'da という血族集団があるが、その中の Washe'ton という準血族集団のなかでは、部族は、“靄のなかを歩く人”、あるいは、“風で舞い上がった埃

の中”と言う意味の Ushu'demoⁿthiⁿ という名前と呼ばれていた。この名前は、オマハ族の名前としては、さしたる重要な意味を持っているものではないが、その意味するところは、われわれが、同語族のオセージ族に注目するときに明確になってくる。その部族のなかには、Monso'tswmoⁿiⁿ、これは“もやとか埃で隠れて歩く人”という意味であるが、そう呼ばれていた血族集団がある。その言葉は、この血族集団が保持していた、戦闘に関する宗教的な儀式に関わるものである。戦闘集団がこれから相手を攻撃しようとしている、あるいは、退却を余儀なくされているときに、その儀式を行うのが、こうした血族集団を取り仕切っている場所だった。そして、その儀式というのは、戦士たちが彼等の敵から姿を隠しても行動することが出来るように、靄を湧きたてたり、雲のように埃を舞い立てる強い風を起こす力を持っていた。一方でまた、“進路をはっきりさせる”と言う意味の、Uzu'gaxe という人の名前は、同じ名前のオセージ族の血族集団の役割にその説明があり、その仕事は、危険な川を安全に渡河したり、崖を安全に回り道したり乗り越えたりできる路を探すといった、戦闘集団が進む進路に横たわっている様々な自然の障害物を乗り越えたり、あるいは、回避する経路を見つけ出すことであった。

こうした、これまでに述べてきたようなことに似た例が沢山あり、それらのいずれもが、宗教的な儀式や慣習というものがある部族ではなくなってしまうが、同語系族のどこかの部族に残っていることがよくある。こうした部族がともに受け継いできた宗教的な儀式とか慣習のすべてがそうであったようだし、そして、それらをかたちづくっているもの、すなわち、こうした同語族の部族がそれらの起源としてきた祖先の社会の多くものの比較研究がなされ、なぜ、ある形式、宗教的、かつ、神聖なものが、失われ、そして、あるものは残り、発展していったのかという疑問に光を投げかけられるであろう；そして、人々の起源がそれらの何処にあるのか、いずれに適合しているのか、そして、後者の場合には、文化というものが、どんなものから生まれてきたのかというような疑問についてもしかりである。

こうした同語族の部族の起源となった共通の源に言及した慣習すべてについて、そこには親社会、あるいは、共通した社会の名前の参考となるようなものは、なに 1 つ見つかりそうにない。ポンカ族、カンザ族、Wazha'zhe(オセージ族) は、すでにその意味が失われてしまった古い用語である；こうした名前は、同語系部族のなかの男達の集団の名前として生まれたものであり、5 つの同語族の部族のうちの 3 つが、それらを自分たちの部族の名前として使っている。オマハ族とか、クワポウ族のような記述的な名前が、こうした部族のあいだでは、血縁関係集団につけたものとしては存在していないということに注目しなくてはならない。血縁関係の集団を呼ぶときによく使われていた名前のなかでは、われわれは、よくあるひとつのものを目にするが、それは、いつも、部族のなかで非常に重要な仕事を持っている集団に対してつけていたものである。これと同じような名前が、血族集団よりももっと包括的な、部族のなかのある集団を呼ぶときに使われている。この名前は、“指導者”という意味をもった Hoⁿga である。カンザ族には、Great Hoⁿga、そして、

Small Hon'ga、さらに、Separate Hon'ga と呼ばれた男達の集団がある。クワポウ族にも、Great と、Small Hon'ga という、全く同じ名前の二つの男達の集団がある。オマハ族には、この名前は、部族のなかの二つの大きな分族の一つ、Hon'gashenu、つまり、Hon'ga の人たち、につけられており、そして、この中のひとつにも、Hon'ga という名前に関係した男達の集団がある。オセージ族の場合には、部族の 5 つある集団の 1 つは、Hon'ga と呼ばれている。オセージ族のなかに別に、Hon'ga untanatsi、Separate Hon'ga と呼ばれている集団がある。次にかかげるようなオセージ族につたわる伝記が、Hon'ga untanatsi とは一体誰のことか、そして、そうした人たちがどんな風にしてオセージ族の社会の一端を担うようになったかを伝えている。

オセージ族が獣を追って荒野を渡り歩いているときに、彼等と同じ言葉を話す部族と出会った。このよそ者の人たちは、自分たちのことを Hon'ga と呼んでいた。オセージ族は、彼等と友好的な関係を築き、彼等が自分たちと一緒に、オセージ族の 1 つの部族になるように誘った。Hon'ga の者達はこれに同意をし、それが今日、Hon'ga untantsi として知られているその子孫達なのだ。

Hon'ga utanatsi は、大まかに言えば、“Separate Hon'ga ”といえるかもしれないが、しかし、utana tsi という言葉は、たんに“separate”という言葉以上のなにか深い意味を持っている；彼らは、この集団が何故そのように区別されなければならないかという理由を説明している。オセージ族が出会い、自分たちの仲間に加わるように説得したこのよそ者の Hon'ga の集団は、自分たち自身の Hon'ga という名前を捨てようとはせず、そして、オセージ族自身が、Hon'ga 族の人々と呼ばれていたので、新しく加わった彼等に名前をつけ、そして、と同時に、部族のほかの者達とはっきりと区別するために Hon'ga という名前に、それとわかるような言葉を付け加えなければならなかったのだ。こうした注釈的な言葉が、utana tsi、この言葉そのものが(“separate”)という意味を持っている、なのであった。こうして、オセージ族の仲間達は、かれらを、Hon'ga utanatsi と呼んだ。

カンザ族のなかの Hon'ga untantsi の血族集団の名前もやはりおなじような意味をもっており、カンザ族のひとたちも、オセージ族とおなじように、自分たちの通常の名前として Hon'ga 族と言う名前に固執していたことを示している。

ポンカ族にも、過去において、彼等、ならびに、彼等と同語系の言葉を話す人々は、オマハ族を Hon'ga 族という名前で知っていたという、長い間の言い伝えがある。ある事件が、ネブラスカの北部地域に住んでいたちいさな集団の子孫に与えられた部族の名前が、Hon'ga she'no'wathai ke (或いは、Hon'gawa'xthi I ke)、“Hon'ga の人たちが虐殺された場所”と言う意味であるが、であると説明していることと関係している。この小川のある場所で、オマハ族は、部族の多くのものが殺害された名の知れぬ敵と遭遇し、そして、その部族との戦いで、壊滅的なダメージを受けた。この小川の名前に関連した言い伝えが、オマハ族、ならびに、ポンカ族の双方に知られており、そして、その両方の部族の間で、

その言い伝えは、ここで使われている **Hon'ga** という名前がオマハ族のことであると言って
いるのだ。1月の月に対する名前であるオマハという言葉は、**Hon'ga umu'bthi**、**“Hon'ga**
族の小屋に舞い込んで来る雪の漂い” という意味であるが、だったのだ。これが、部族の
名前になっている。

こうした言い伝えや、オマハ族、オセージ族、カンザ族、そして、クワポウ族の間で、
の一部の者達や男達の集団に **Hon'ga** という言葉を使うのは、この名前を自分たちの部族の
名前として使うことに固執したり、使うことによりお互いに認識しあったりしていた事実
と共に、**Hon'ga** という名前が、人々が、1つの組織集団、ないしは、部族としてともに暮
らしていくときに、そこで人々が自分たち自身を呼ぶ名前であったのだろうということは
決して可能性のないことではない。**Hon'ga**（“指導者”）の一般的な意味は、ほかのインデ
ィアンの部族が、自分たち自身を他のものと区別するときを使う呼び方の名前、たとえば、
“男達”、とか、“人々”というような言葉の類ではないのだ。この **Hon'ga** という言葉は、
Nudo、**Hon'ga**、“戦闘の指導者”とか、“指揮官”といった意味であるが、なにか、こうし
た、仕事の役割の称号を形づくるような言葉と密接な関係をもっている。

男達の集団、個人の名前、そして、オマハ族と同語族の部族の間で別の形で使われてい
る言葉に関する次のような情報は、ここの著者達により纏められた独自の記録から引用さ
れたものである。

ポンカ族

Ponca は、古い言葉で、いまではその意味は失われている。これは、もともと、オセージ
族とか、カンザ族、そして、クワポウ族、ただし、オマハ族にはなかったが、その彼らの
間の、ある一つの血族集団の名前、もしくは、また、その准血族集団の名前から来たもの
である。オマハ族になかったというのは、ポンカ族が、部族が分離していく前にオマハ族

-
- a ポンカ族は、今は分裂している。一つの集団は、1883年にチェロキー族からの政府により買収
され、その後、数10年ほどしてからこの部族に単独保有の形で分割された土地であるが、その北
部オクラホマの地に住んでいる。ほかの集団は、北部ネブラスカのニオブラーラ川流域に住んで居
る。彼らの土地は1881年に彼らに与えられた土地で、その数年後に彼ら独自の努力で分配された。
すでにこうした二つの集団は異なった集団として話されている。オクラホマに居る集団は
“hot-country Ponca”と呼ばれているのに対し、ネブラスカの人たちは、“cold-country Ponca”と
呼ばれている。ポンカ族と合衆国との関係は、1817年に結ばれた協定により、1812年以前の平和
と友好のものとして確立されている。1825年に別の協定が結ばれ、これにより、アメリカの市民権
を持った者だけが、取引き商人として彼らに近づくことが許され、部族は合衆国政府に対し、侵略
者の処罰を委任することに同意した。1858年に、ポンカ族は合衆国政府に対して、彼らが狩猟し
ていた土地を売却したが、しかし、彼ら自身の土地は確保していた。1865年に、この部族は強制
的にインディアン強制居住区（現在のオクラホマ州）に移住させられた。P.51を参照

のなかに、ポンカ族が一つの血族集団を形成したという言い伝えによるもので、これは重要な事実である。オマハ族が部族につたわる神聖なるもの、彼らの宗教的な儀式や行事の役割分担を担っていたので、ポンカ族は、その後ずっと、“Orphans”と呼ばれていた。

ポンカ族には、七つの男達の集団があり、その名前は、; Waca'be, Thi'xida, Ni'kapashna, Pon'caxti, Washa'be, Wazha'zhe, Nu'xe である。こうした集団は、部族の円陣の住居、ここをポンカ族は、hu'thuga という名前、これは、オマハ族も同じように彼らの

部族の村につけていたものであるが、で呼んでいたが、その東の入れ口付近の南からばじまり、図(fig. 2) に示したような順序でキャンプを張っていた。

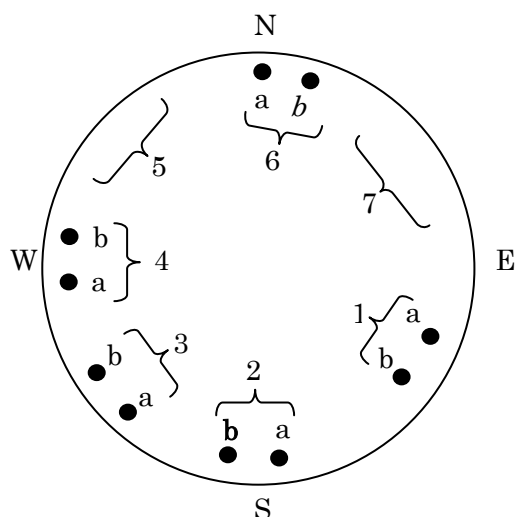


Fig. 2 ポンカ族 hu'thuga の配置図

1. **WACA'BE**. 黒い熊団: (a) Waca'be; タブー黒い熊の脂肪 (b) Hi'cssa (走っているときの伸びた脚にちなんで、伸びたを意味している); タブー 鳥。
2. **THI'XIDA** 意味は失ったもの集団 (a) Thi'xida タブーは血 (b) Tngthon'cincnedeweti (ingthon'cincnede ピューマ; weti そこに住む) タブーは、青(もしくは、緑)の塗料
3. **NI'KAPASHNA** 男の頭団 (a) Taha'ton itazhi (ta 鹿; ha, 皮; ton 持つこと t'tazshi 触るな) タブーは鹿 (b) Tecin'de itazhi (te, バッファロー; cin'de, 尻尾; itazhi 触るな) タブーは、バッファローの尻尾
4. **PON'CAXTI** 正真正銘、もしくは、もともとの ポンカの血族集団 (a) Pon'caxti; (b) Monkon (神秘、もしくは、祈祷); タブーの 1 つは、バッファローの頭
5. **WASHA'BE** 水平線に向かって見える暗いもの; タブーはバッファローの子牛の毛皮
6. **WAZHA'ZHE** 古い集団 (a) Wazha'xhe (本来の Wazha'zhe) 古いがらを脱皮した後の、再び、元の力を取り戻したヘビにちなんで付けられた名前、; (b) Wazha'xhexude (灰色の Wazha'xhe); ヘビが脱皮した後の抜け殻が灰色であるところにちなんで付けられた; タブーの 1 つは、ヘビ
7. **NU'XE** 氷; タブーは、オスのバッファロー

男達の集団の儀式、ならびに、習慣

1. WACA'BE 集団

Waca'be の血族のなかの Hi'cada という準血族集団は、春一番にとどろく雷を聞いたときに歌われた儀式の歌の保持をする役割を担っていた。この準血族集団は、鳥がタブーであったが、血族のなかではワシという名前と呼ばれていた。そして、雷となにか関係があると考えられていた。彼らは、死んだあとは雷の村に行き、そして、彼らの声が、雷が鳴るときに聞こえるのだ。彼らは木に登ることが許されていて、こうして彼らは上へ行くことができ、これにより彼らの死というものを予期し、その結果、自分達の寿命を短くしていた。伝説によれば、(48 ページを参照のこと) この血族に属するものたちは、ヒマラヤスギの冠をまどっていたといわれている; この同語系部族の間では、ヒマラヤスギというのは、雷にまつわる儀式に使われてい

たものであった。(オセージ族の Ni'ka wako'dagi の項(p60); オマハ族の Cedar Pole (p229); オマハ族の Tha'tada 血族集団の熊、ならびに、ワシの集団 (p159); さらに、

雷と戦闘とのかかわり、ワシと戦闘とのかかわり、などを見ていただきたい。) ポンカ族の部族集団のなかにおける Waçabe 血族集団の地位は、オマハ族のなかの Wwzhi'shte という血族、この集団も雷と関係をしていたが、この血族の地位と似たものがあつた。

それぞれの血族集団が、自分達の矢に独特の印しをつけるということは、どの集団にも共通したことで、これにより狩猟で、致命的な役割を果たした矢がどこの血族のものかを見分けることが出来た。しかしながら、この印というもののでも、それぞれの個人の印というものを識別したり、見分けることは出来なかった。Waçabe の集団の矢は、羽の長さの半分くらいが、赤い軸をしていた。

子供たちの髪の毛の象徴的な切り方は、頭の半分をきっちりと借り上げ、そして、残りのほうは、首にかからない程度に残していた。(fig.3.)

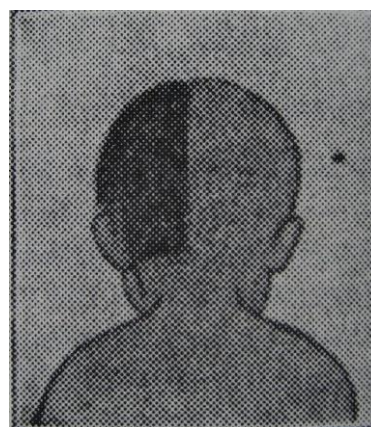


Fig. 3. Waçabe 血族集団(Ponca)の髪型

2. THI'XIDA 集団

ポウニー族は、ポンカ族のことをまとめて、Thi'xida という名前と呼んでいるといわれる。この集団は、戦闘での栄誉を与えられるときに、戦士の信憑性を評価するときに役割を果たす集団であつた。以前には、こうした役割を持つ集団には、二つのグループがあつたが、しかし、そのうちの一つは、Ton'deamonthin という担い手で、その役割と一緒に20何年か前に消えてなくなった。もう一つは、先の世紀の末近くまで、Shu'degaxe により、引き継がれていた。こうした、栄誉を授与するという儀式は、オマハ族の Wate'giçtu (p 434)と似たものがあつた。こうした血族は、酋長を選ぶときの遂行役を勤める権利も持っていた。

Ingtho'n'çinçnedeweti という準血族の構成員達は、彼らのテントの片方の側に平和のパイプ(これは、Wa'wan という儀式で使われたものであるが、)を、そして、もう片方にはビューマの絵を描いていた。こうしたパイプには、通常は使うことの出来ない緑とか青の色が使われていた。Du というのは緑という言葉; du çabe, 青; çabeは黒; こうした言葉は、二つの色が同じ色と考えられていて、その一つが、ほかのものより、ただちょっとだけ暗い影をもっているに過ぎないと思われていた。ビューマの毛皮は、こうしたパイプを覆ったり、あるいは、包むときに用い

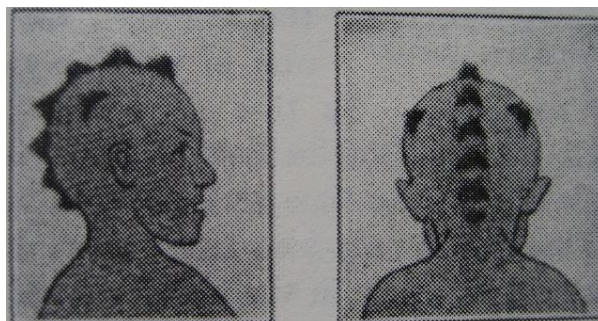


Fig. 4. Thi'xida 血族集団(Ponca)の髪型

られていた。この準血族集団の名前（“ビューマと一緒に住んでいる”という意味であるが）は、平和のパイプを覆っているということに由来している；これらのものやビューマというのは、テントを装飾するときの代表的なものであり、準血族の名前を理解するときの手かがりを与えてくれる。— “平和をもたらしてくれる覆いをかけられたパイプと一緒に住んでいる人たち。” というように。この血族の矢の軸は、黒く塗られていて、そこに鳥の羽が結びつけられていた。そして、止め紐は、タブーの黒色の代わりに赤く塗られていた。

子供たちの象徴的に髪型は、頭の前の部分から襟首のところまで鶏冠のように、髪を残していた。この鶏冠状の髪の毛は、ちょうど、鋸の刃のようにギザギザに刈り込んでいた。鶏冠状の髪の毛の両脇には、ちょっとした飾り房の髪を残していた。（fig. 4）このギザギザになった鶏冠状の髪型は、オト族のバッファロー血族集団（スー族の血統でもある）の髪型と似たものであるが、しかし、ギザギザの形はむしろ、オマハ族のなかのバッファロー血族のものと似ている。こうした相互の類似は、部族のタブーというものが、殺されたバッファローの血と関係していたのかも知れない

この集団に属する人たちは、次のような方法で、頭痛を癒す力を持っていたといわれている；病人が、弓と矢を持って Thi'xida のところにいく。と、彼は、つばでその矢を湿らせ、それを弓の弦にセットし、そして、病人の頭に四度ほど、当て、そのあと、弓でもって頭をこすってやると、頭痛が和らげられるというわけだ。

3. NI'KAPASHNA 集団

Ni'kapashna（“頭骨”）という名前は、頭皮を剥いで、頭の骨をさらけ出すということに由来するものであるといわれている。この血族集団は、戦闘のパイプを保管する役割を持っていて、戦闘をするときの会議を取り仕切っていた。また、鹿狩りをするときの指示をすることも彼らの仕事であった。

Taha'ton itazhi の仲間属するものが死んだときには、鹿の皮で作られてモカシン（これは生きている人たちにはタブーのものであった。）が、これは、おそらく、“彼が、道に迷わないように”、そして、無事に旅をし、精霊の世界で、“彼の仲間たちから見分けがつくように” という意味があったのだろう、彼の足にとくに供えられた。

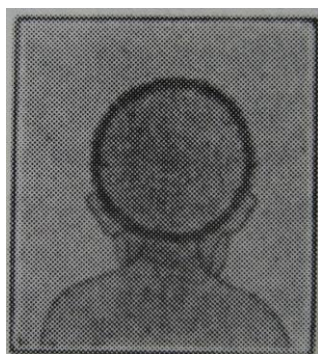


FIG. 5. Ni'kapashna 血族集団(Ponca)の髪型

子供たちの頭の象徴的な刈り方は、fig. 5 に示したように、頭の周りに残す以外は、すべて丸坊主に刈り上げるというものであった。

4. PON'CAXTI 集団

Pon'caxti (xti、“本来の”、もしくは、“正真正銘の”とい

う意味)の集団は、部族の円陣の後ろの部分、つまり、入り口に面していたが、ここにキャンプを張っていた。この血族集団と、その準血族集団である *Moⁿkoⁿ* は、もっとも重要なパイプ、そのうちのひとつは、酋長のパイプであり、これは、祈祷をするときに使われたものであるが、これを保持する役割を担っていた。この血族により、オマハ族の神聖な杖の発見につながる言い伝えが伝えられていた;それは、*Moⁿkoⁿ* という準血族のあるものが、競争をして、最初にその杖に辿りついたというものであった。(p. 218.) ポンカ族が、先に示したような順序でキャンプをしなければならない、たった二つの儀式があり、その時に、言われているのは、“人々は、*hy'thuga* を完璧に作らなければならない。”と、言うことだ。この儀式というのは、*Feast of Soldiers*, この儀式は、通常は部族の者たちがバッファローの狩に出かけるときに催されるもので、この儀式と、もうひとつは、*Turning the Child* といわれる儀式であった。後のほうの儀式のときには、子供の頭につけていた頭髮の房が切り落とされ、そして、その血族集団に属することを表すような名前がその子供に与えられた。*Moⁿkoⁿ* の準集団が、こうした二つの儀式を執り行う任に当たっていた。子供たちに関わる儀式は、春に執り行われていた。テントが *Moⁿkoⁿ* 準集団の前に張られ、部族の円陣の中心に向いていたが、こうして、この儀式が“完璧である”、ということにこだわっていた。テントのなかには、— ところが、“神聖な場所であることを象徴する”ように一ちょうど、囲炉裏の近くの中心のところに石が置かれ、その上に天草が捧げられた。この *Turning the Child* の儀式をつかさどる、世襲の権利を持った老人のところに子供たちを連れて行くのは母親に課せられた役目であった。その子供がテントの中に入ると、彼は、その子供を手で抱き、テントの中心に向かわせる。そして、東を向いて石の上に立たせる; そのあと、彼はその子供の肩を抱いて、南に向かせ、彼の足を石の上にのせる。同じようにして、今度は、子供を西のほうに向かせて、また、足を石の上にのさせる。さらに、もう一度、前と同じように子供を持ち上げ、今度は北の方角に向かせ、やはり石の上に足をおかせる; そして、最後に、背中を持ち上げて、東の方角に向ける。“子供を回すのは、”、古い言い伝えでは、“子供を四つの方角から来る生命を授ける風と対面させる”もので、また、“石というのは、長生きを象徴するもの”であるとのことであった。こうして、子供の生まれたときにつけられた名前が“消えてなくなり、”彼の父が属している血族集団の名前が、普段の呼び名として彼に与えられた。頭のとっぺんから垂れ下がった髪の毛の房を持った子供たち以外は、すべての子供たちがこの“回し”を受け、この儀式を取り持った老人たちがもつ包みのなかに保管された。それから、子供は家にもどり、父親が彼の血族集団の独特なやり方で彼の髪型を整えた。(オマハ族の、*Turning the Child* の儀式を参照 P. 117) (*Feast of the Soldier* 並びに



FIG. 6. Pon'caxti 血族集団
(Ponca)の髪型

その儀式の説明については、pp. 309 – 311 参照)

この血族集団というのは、バッファローの狩にも関わる任務も持っていた。

Moⁿkoⁿの準集団の人々は、彼らのテントを黒、または、黄色の帯状の線で彩っていた。

子供たちの象徴的な髪型は、頭の前のところに、ひとつだけ房を残し、そして、首筋のうなじのところに一つと、あとは、頭の両側に一つずつ、残しておくというものであった。(fig. 6)

5. WASHA'BE 集団

この血族集団の名前の、Washa'be と意のは、部族が年間の恒例行事でとして行うバッファローの狩のときのオマハ族の指導者により使われていた儀式をつかさどる人たちの名前



FIG. 7 Wash'abe 血族集団
(Ponca)の髪型

と同じもので、また、オマハ族では、White Buffalo Hide の保管されていたテントの管理をしたり、あるいは、その行事を執り行う Hon'ga という集団の一部の人たちの名前とも同じであったし、さらには、トウモロコシの色にも同じようなものがあった。(p. 261 参照) オマハ族の Washa'be という準集団のように、ポンカ族のなかのこの血族集団も、部族が実施するバッファローの狩にかかわる役割を持っており、そして、その時に人々を統率したり、狩での序列をキッチンと守らせる仕事に携わる人たちに指令を出していた、 Pon'caxti という血族のなかの Moⁿkoⁿ という準集団とも関係があった。ポンカ族のなかには、トウモロコシを植えたり、あるいは、この面倒をみることに関係するような儀式は特になかった。ポンカ族は、食料は

おもに狩に依存していたといわれており、彼らはトウモロコシを栽培するよりむしろ、物々交換で手に入れていた。

子供たちの髪型の特徴は、頭の前のところと、そして、首筋のところにも一箇所だけに、わずかの髪を残しておくというものであった。(fig. 7)

6. WAZHA'ZHE 集団

オセージという名前は、wazha'zhe という言語がなまったものである。この集団のタブーとか、習慣のなかに、Wazha'zhe あるいは、Osage の人々の、古い時代の儀式(蛇にかかわるような儀式)のなにかを保持していたかどうかということは、この著者達がそれを出来るかということより、もっとさらに詳しい研究によってのみ明らかにされるに違いない。

この集団に属するものたちは、蛇に触ってはいけないし、ましてや、殺してもならなかった。そして、テントに入るときには、いつもドアから入るように注意を払わなければならなかった。そうしないと、蛇が入ってきて、そして、危害を加えるといわれていた。この

集団の母親達は、子供たちにドアから正しく入ることの重要性をとくに注意して教育していた。そして、とくに小さな子供たちは、テントをくぐって入ったりすると、彼自身が、そして、そこに住んでいる人たちが怪我を被ったりするということで、彼らはことのほか厳しく監視されていた。

あるものに恨みを抱いていたような男は、鞭から切り取った蛇の形を、その相手のテントのなかにおいて、彼の個人的な恨みを晴らすことが出来た。そうすれば、その男は、すぐに蛇にかまれたということだ。描き出された蛇の絵というのは、ガラガラ蛇の姿をしていた。

部族の誰かが蛇にかまれたときには、彼は、まず、**Wazha'zhe** の集団の誰かを呼びに行き、かれは、テントに来るとすぐに、杖で囲炉裏のよこにアナを掘り、そして、傷口から血を吸い出し、この傷口から、それ以上、毒が回らないようにした。この穴を掘るという目的は、情報提供者からは、知ることが出来なかった。



FIG. 8 **Wazha'zhe** 血族集団
(Ponca)の髪型

部族が狩をするときには、女達は、バッファローの骨を集め、これを煮立てて、後で使うように骨髓を抽出していた。もし、あるものがその作業をしている女をからかうときには、かれは、杖を持って近づいていき、その容器から浮きかすを掬って捨てる。この行動は、もはやその骨から骨髓を抽出する必要はないというものであった。そして、このいたずらをほぐす唯一の方法は、**Wazha'zhe** を呼びにやり、到着次第に、その杖で、煮えたぎる骨から脂肪を取り除くことであった。こうすると、髄液だけをいったん取り出すことができ、おんな達はこれで、十分な脂肪を間違いなく確保することができた。“これは、私の部族の者たちの一つの神秘だ。”と、それについてのわれわれが質問したら、彼は、なにか意味ありげな笑いを浮かべて、こう答えた。

Wazha'zhe の人たちは、戦闘好きで、喧嘩の耐えない人たちだった。そんなわけで、部族の組織のなかでは、彼らに、平和のパイプを保管する役割が与えられていた。この信頼を受け入れることにより、彼らは、自分達が部族のなかで、より平和的に振る舞い、そして、しっかりとその役割を果たすことを約束していた。この血族集団の中の二つあった準集団のうちのどちら、すなわち、“生粋の” **Wazha'zhe** か、あるいは、“グレイと呼ばれる” **Wazha'zhe** の人たちのどちらかが、実際にこの平和のパイプを保管していたのかは、いまだ議論の余地がある。

部族の伝令の役割もこの集団の任務であった。

この集団の子供の髪型の特徴は、頭の前のところに一塊の髪を、そして、頭の後ろと、両方の耳の上に一箇所ずつ、髪を残していた。

7. NU'XE 集団

Nu'xe というこの集団の名前は、オマハ族のなかにも見ることができるが、これは、雹にまつわるものである。この名前のオセージ族の集団は、Buffalo-bull の人たちと非常に密接な関係をもっており、このつながりには、ポンカ族の Nu'xe の集団のタブーが、オスのバッファローであるということに注目する必要がある。オセージ族は、ポンカ族は、かつては彼らの部族の一員であったが、ずっと昔に、かれらは狩をしているときに、どこかにいってしまい、以来、ポンカの人たちは二度と戻らなかったという言い伝えがある。オセージ族には、ポンカという血族集団があり、そして、ポンカ族が Wazha'zhe という血族集団をもっているということ、そして、その双方の部族に Waca'be という集団が、あるは、Hi'cada という集団があり、そのどちらの部族でも、これが、雷にちなんだ集団であったということに目を向けたい；こうした互いの類似性のあらゆるものが、おそらくは、ポンカ族とオマハ族が、後の時代のように非常に密接な関係にあったずっと以前に、そして、彼らが今のようにはっきりと区別されるようになるそれ以前に、こうした動きが実際に行われたという結果ではないかと思われる。

言い伝えに見られる説明^a

平和のパイプ

人々が、— 丸太をつなぎ合わせた— 筏にのって大きな川のところにやってきた。そして、川の岸にキャンプを張った。そこにいる間に、彼らは、自分達自身が、u'shiko^a、自分達が移動する範囲と境界を、彼らの行動が統治されるような規則を定めようと考えた。彼らは、牧草地と、雑草地とを明確にわけ、お互いの顔が目分けられるようにし、腰を落ち着け、そして、お互いのあいだで、相手を妨害しないようにした。

そして、彼らが思案しているときに、近くの森の中でふくろうの鳴く声を聞いた。すると、人々を呼び集めた指導者が、“あの鳥は、われわれの仕事を手伝おうとしているのだ；かれは、自分が助けをしようとわれわれを呼んでいるのだ。”といった。そのことがあったすぐその後に、彼らは、木をつつきながら、鳴いているきつつきの鳴き声を効いた。そして、指導者は、こういった。“かのきつつきの鳴き声は、われわれを呼んでおり、そして、手助けをするつもりだ；彼は、われわれの仕事の一役をになってくれるだろう。”と。

それから、指導者は彼に部下として働く約束した男を選び、そして、こういった。“森に行つて、青白い若木を持ってくるように。”と。そこで、その部下は出かけて行き、荒い樹皮のついた若木を持って帰ってきた。“これは、私達が必要としているものではない。”と、その指導者が言った。“もう一度、森に行つて、もっと滑らかな樹皮の若木を持ってくるように、そして、枝分かれのところを薄青色に塗りなさい。”（そこに枝が生えてくるのだ。）と。そこで、その部下は森に戻り、上で書いたような若木を持って帰ってきた。

指導者がその青白い若木を取り上げると、そこに、ワシがやってきて、会議を開いてい

る長老達の座っている上を飛びまわっていた。彼は、綿毛のような羽を投げ落とした；その羽が落ち、そして、きれいに片付けられた場所の中心に、上手に舞い降りた。これは、白ワシであった。指導者は、“これは、われわれがほしかったものではない；”と、いったので、その白ワシはどこかに飛んでいってしまった。

すると、こんどは、はげワシがやってきて、まるで、獲物に襲い掛かるように急降下をしてやってきて、そのきれいな場所、羽を広げて、獰猛な泣き声をたてながら舞い降りてきた。そして、自分のやわらかい羽を、ほかのワシの羽がしたのと同じように、大地に突き刺さるように、一本落とした。すると、その指導者は、“これも、私たちが望んでいるものではない；”と、言う、そのハゲワシもどこかに飛んでいってしまった。

次にまだら模様のワシが会合を開いている、その上に跳んできて、ほかのワシ達がしたのと同じように、羽を落としてたてた。指導者が言った。“これも、私達がほしいと思っているものではない；”と、言う、やはり、まだら模様のワシも飛んでいってしまった。

すると、今度は、おかしい尻尾をしたワシ(皇帝ワシ、*Aquila heliaca Savigny*) がやってきて、やはり、人々の上を旋回した。そして、一本の綿毛を落とすと、それが、そのきれいに清められた場所の真ん中にまっすぐに立った。すると指導者が、“これこそ、われわれが望んでいたものだ。”と言った。このワシの羽こそ、ほかの鳥達のもの(ふくろうやきつつき)のものと一緒に、そして、動物たちのもの、こうしたものは、あわせて九つのものを作るのに使われたが、これらとともに、平和のパイプを作るのに使われたのである。これらのパイプは、ほかの部族との友好関係を築くために使われるものであった。^b

部族の組織

平和のパイプが作られたときに、(こうしたものは、“他の部族との友好的な関係を構築する”ためのものであった。) 部族のなかでの平和を保つために、このほかにも七つのパイプが作られていた。こうしたパイプは、流血を防ぐという目的でも使われていた。あるものがどうしてもほかの人を殺さなければならないというようなときには、酋長は、その憤慨したものの親戚にそれをもたせ、かれらにそのパイプを提供しなければならなかった。もし、それが拒否されたような場合には、パイプはもう一度、提供された；そして、このパイプが差し出され、拒絶が連続して四回続くと、酋長は彼らに向かって、“お前さんたちは、責任を取らなければならない；われわれは、何もするつもりはないし、このパイプを

a 酋長やそのほかボンカ族の有力者からの話

b Wa'wan パイプのことに関するボンカ族の解説は、こうしたパイプをアリカラ族から 贈られていたオマハ族の説明(p. 74)や、オマハ族の儀式についての説明(p. 376) とよく比べてみる必要がある。ここで言う、九つのものとは次のようなものである。ふくろうの羽、ワシの羽根、きつつき、ウサギ、鹿、青白い木、まだらのがま、そして、臄である。

理解するようお願いしたりはできない。” このことは、助けや同情を訴えることはできない復讐なかでとられる彼らの行動なので、彼らのうちのだれかに災難が起こるかも知れないということを意味していた。

こうした七つのパイプが役割を果たすと、これらは、その部族の別々の血族集団の間に分配されていった。

そのパイプの伝達人が最初に持っていく血族集団は、Waq̣a'be の集団であった。それらは、平和には関係したものではなく、むしろ、生活習慣に関係しているような儀式のなかで使われていたようであった。Hi'çada が、真っ赤に焼けた石をもってテントの中央に座り、そして、手には、ヒマラヤスギの枝の花冠を持っていた。そして、パイプの伝達人が順番にパイプを回した。そして、その日になるまでも、彼らは、ほかの集団から、“あなた方は、人間ではない、あなた方は、平和のパイプを所持していないからだ!” と、言われながら、この出来事の発端を思い出させられていた。

パイプの伝達人が次にやってきたのは、Thi'xida のところであった。彼らにパイプが渡されると、彼らは、次の酋長を選ぶ、会合を取り仕切る役割を負わせられた。

その次は、Ni'kapashna のところにやってきて、パイプが渡されると、かれらは、戦闘の会議を取り仕切る役割が課せられ、そして、鹿狩りをするときには、人々が移動する方角を決め、こうすることで、獲物を追跡するときの規律がしっかりと守られていた。次に、パイプの伝達者は、Pon'caxti と Mo'kon'のところにやってきた。そして、パイプが彼らに手渡された。

次に、Washa'be のところにパイプが届けられた。この集団は、Mo'kon'とともに、部族で実施するバッファローの狩を取り仕切る任務を与えられた一旅の方角とか、キャンプの設営、そして、規律を守ることなど。こうした二つの集団からは、必ず、あたりの主酋長が送り出されなければならなかった。

パイプの伝達者たちが Wazha'zhe に到達すると、後の部分が取り外された。すると、その部族の党派の間にトラブルが発生し、殺人事件が発生した。そこで、彼らには、平らなパイプの軸を渡す代わりに、それを丸いものにし、飾りをつけて彼らに渡した。長い間の確執のために、彼らの間にはぞんざいなところがあり、今日になっても、平和を維持するためのパイプが送られた分派の間に、言い争いが続いている。

パイプの伝達者が Nu'xe に来て、パイプと、そして、バッファローの狩での役割を与えた。

それぞれの集団がパイプを持っていたが、しかし、酋長が持っていたパイプは一本きりであった。これは、指導者的な酋長により、保管されており、その部族のなかで、問題を起こす人をいさめるときに使われていたものであった。そして、このパイプを保管する役目は、Mo'kon'集団にあった。

ある男がいさめられるときには、すべての酋長達が一同に会し、そして、このパイプが主酋長の手に渡され、そこにいるすべての酋長達が、これでタバコを吸った。そして、



STANDING BUFFALO



WHITE EAGLE (XITHA'cKA)

それぞれの酋長は、パイプをきれいにするように手に取り、犯罪人に対して、自分の思いを明らかにした。彼は、土の上にタバコの灰の一部を落とし、そして、“これが、足の弱いところを、うずくようにさせるだろう。”と言った。そのあと、彼は、パイプのなかを掃除用の棒でくるくる回し、パイプの中から、さらに灰を取り出し、それを大地の上におき、“これは、臍の付け根のところにだ。そして、それが、苦痛を走らすだろう。”（背中に）といった。そして、三つ目のしぐさとして、その掃除用の棒をまたまわして、パイプからさらに灰を取り出し、それを土の上におくと、“これは、頭の下にある背骨のためだ。”と言った。四度目にパイプのなかからその掃除用の棒で灰をかきだし、それを大地の上におくと“これは、彼の脳天のところにだ。”この行動が、その後すぐになくなった男の息の根を止めた。

WAZHA'ZHE の集団

Wazha'zhe の集団の Standing Buffalo（挿絵 2）が、10 年ほど前のあるとき、次のような話をした：

私が小さいとき、わたしは、よく母親に、自分達の部族はどこから来たのか尋ねたが、ある日彼女が、“時代から時代に長い間伝えられてきた話をしてあげましょう。”と言ったときまで、彼女はなかなか私にその話をしてくれなかった。

“まさしく、この世の始まりのときに、Wakon'da が、Wazha'zhe の部族 一男と女、そして、子供たちを作った。彼らが生まれると、彼は、“行くのだ！”と言った。そこで、人々は、自分達のもっているものすべてを携えて、子供たちをつれ、太陽の沈むほうに向かって旅立った。そして、彼らは大きな水場のあるところまで来た。自分達がもうこれ以上前に進めないとなると、彼らはそこで前進するのをやめてしまった。すると、Wakon'da が、再び、“行くのだ！”と言った。そこで、人々はもう一度旅を始めたが、自分達の身の上に何が起こるのだろうと不安になった。そして、彼らが水のなかに足を踏み入れると、水のしたに岩が現れてきた。そして、これが水の表面の上に姿を現し、そのほかにもほとんど水をかぶっていない岩が沢山出てきた。人々は、姿を見せた岩の上を、岩から岩へと歩いてゆき、丘にたどり着くことが出来た。そして、彼らが、乾いた大地の上に着くと、風が吹き、水面が激しく波立ち、水の上に出ていた岩を陸地に吹き上げ、そこに、大きな崖が出来た。そこで、人々は、苦労して作った小屋に入り、自分たちの住むところが出来たことに感謝をし、そして、これらかも彼らの平和な生活がずっと続くことを助けてくれるようお願いをした。ここで、人々は水辺に住んでいたのだが；しかし、Wakon'da が、再び、“行くのだ！”と指示した。そこで、人々はまた旅を続け、今度は、自分たちとまったくそっくりな様相をもった人々のところにやってきた；しかし、かれらには、その人たちが、友好的であるのか、それとも、敵対者なのかもわからず、お互いに戦うつもりで、猛然と近づいていった。そして、混乱がしばらく続くと、Wakon'da が出てきて、“ちょっと、待て！”と言った。人々はその言葉に従った。かれらは、お互いに、相手が、自分た

ちと同じ言葉をはなすことに不思議に思い、そして、友達同士となった。

Wakon'da は、人々に一つの弓と、犬と、そして、トウモロコシの実を与えた。そこで、彼らに授けられた弓を見習って、沢山の弓を作り、それをどのようにして使い食料のために野生の動物をしとめるのか、そして、その動物達の毛皮から衣服をどのようにして作るのかを学んだ。犬達はどんどん増えていき、重い荷物を運んだり、狩をするときに使われた。トウモロコシの実を蒔き、そして、それが大きく育つと、食料として非常に適しているということがわかり、彼らはトウモロコシを栽培することを覚えた。

“人々は、さらに旅を続けると湖のところにやってきた。そこで、オマハ族の一族は、神聖なる木をみつけ、自分達と一緒にそれを持っていった。一方、ほかの(ポンカ族) 人々は、旅を続け、今、Nishy'de (Missouri) と呼ばれている川のところにやってきた。彼らは、この川の土手に沿って旅を続け、やがて、その川を渡ることもできるところまでやってきた。そこから、彼らは、さらに陸地を横断し、今、Nibtha'cka (Platte 川) と呼ばれている川のところにやってきた。この川沿いに、彼らは、Missouri 側の反対側にたどり着いた。”

“そして、人々はまたこの川を遡って旅を続け、今日、Niobrara と呼ばれている場所、ここは今自分達が住んでいる場所だけでも、ここまでやってきたのだ。”

この後半の部分は、オマハ族が神聖なる木を発見したあとのポンカ族の移動の状況を取り扱ったものだが、これは、ある年取った男達の仲間の一人から来たものであった。Padouca 族(Comanche 族) との出会いや、当時はどこでも手に入れることが出来たが、馬の入手などについてのように、彼により言い伝えの一部が省略されているところはあるが、これらのだいたいのものは、 Standing Buffalo から聞いた一般的な概略をよくあらわしている。(p, 78 参照)

WHITE EAGLE が酋長になったいきさつ

White Eagle (pl. 3)がどのようにして酋長になったのかという次の説明は、彼自身により、10 年か、あるいは、もうちょっと前に話されたもので、これは、彼が、その後、著者達に対して授けてくれたさまざまな情報の序文のようなものであった。彼は、その話が、彼の部族における地位を明確にする助けになるし、それゆえに、彼の、ポンカ族にかかわる話に重きを置いていたので、きわめて大事なものであると考えていた。この話は、ここでは何度も 18 世紀におけるポンカ族の生活習慣について、言及している：

Zhi'ga'gahige (Little Chief) という名前のついた酋長、彼は、Wash'be の血族集団の酋長であったが、その彼には、戦闘に出陣していった息子があつた。かれは、自分の息子が殺されたと聞き、その若ものがもはや戻ってこないということで、涙を流しながら、その息子のテントの前に座っていた。そして、彼は涙を流しながら、彼が、彼の息子の復習

をするように求めた部族の若者達のことを考えていた。彼は、いろいろな画策をしているときに、ある貧乏な、そして、あまり由緒のある家族ではない若者のことを思い出した。その若い男の名前は、**Waca'bezhi'nga (Little Bear)** といった。酋長は、この若い男が、かれ独特の服の着方をし、そして、色塗りをしていることを思い出し、彼はそんなことをしているのだから、夢をかなえるような行動をし、そして、通常のものがもっている以上の能力や、勇気を持ち合わせているに違いないと考えた。そこで、酋長は自分自身にこう言った。“よし、彼をよんで、彼がどんなことができるか見てみよう。”と。

そこで、酋長は部族のなかのほかの酋長達を呼び集め、そして、みんなが集まると、**Little Bear** を呼びにやった。その若者が会合に到着すると、酋長は彼を指さして、こう言った。

“私の息子は、戦闘に行き、もう二度と戻ってくることはない。私は、彼の死体がどこに横たわっているのか知る由もない。わたしは、ただ、彼が殺されたということだけを聞いている。私は、お前に、私の息子が殺された場所を見つけてきてもらいたい。もし、お前が、四度ほど、無事に戻ってきたのなら、私は、お前のために自分の地位を譲ることにしよう。”

Little Bear は、この提案を受け入れた。かれは、人間の髪でできた玉がついた、神聖な頭かぶりを身に着けていた；かれは、その髪をこんな方法で手にしていた：われの友人の男や女達が髪をとかすときにはいつでも、そして、抜けたどんな髪であろうと、**Little Bear** は、その髪を彼のくれるように頼んだ。こうして、次第に髪が集まり、彼独特の頭飾りを作るに十分な量となった。これは、彼の頭にぴったりの頭皮の帽子であった；その前のところには、人の髪で出来た玉が着いていた；そして、後には、やわらかいワシの羽根と、その鳥の羽からとった鋭い先のついた羽の一つが結ばれていた。このほかにも彼は、神聖なるものをもっていた。それは、バッファローの骨で、彼は、それを自分の腰帯に結んでいた。

Little Bear は、二・三人の戦士を呼び、そして、自分と一緒にいくように頼み、かれらはそれに同意した。かれは、頭飾りとバッファローの骨を身につけ、そして、仲間達と一緒に出発した。途中、彼らは、狩をしているスー族と出会った。スー族の一人が、**Little Bear** めがけて突進してきて、彼は、崖から転げ落ちた。スー族のものが彼の上に立ちはだかり、そして、彼に向かって弓を射た；ところが、その矢の一つは、彼の頭飾りに、そして、もう一本はバッファローの骨に命中した。この2本の矢を射ると、スー族のものは、振り返り、そして、すばやくその場から姿を消した。**Little Bear** は、実はかれは何の傷も負っていなかったのだ、崖をよじ登ってきて、そして、スー族めがけて、弓矢を引き、そして、その男の頭を射抜いた。その頭皮ばかりでなく、**Little Bear** と彼の仲間、数匹の子馬を手に入れた。彼ら一同が部族のところに戻ってくると、**Little Bear** は、息子をなくした酋長に、自分達の戦利品の一部を与えた。

Little Bear は、このほかにも三度ほど搜索にでかけ、そして、いつも成果を手にして戻ってきた。そして、そのたびに彼は、その酋長に戦利品を土産として渡した。**Little Bear**

が、四度目の旅から戻ってくると、酋長は約束の言葉を守り、この若い男の望みどおり彼の役職を彼に譲った。

Little Bear とは、私のおじいさんなのさ。彼が死んだときに、酋長は、長男の Two Bulls に後が引き継がれた。そして、彼がなくなると今度は彼の弟の We'gacapi (pl. 4)^a 彼は、私の父であるが、彼が酋長となり、そして、私が彼の後を継いだというわけだ。

a あるポンカ族の老人が、We'gacapi のことをこんな風に言っていた：“彼は、大成功を収めた人で、かれは、先祖から彼に伝えられている包みを持っていた。これで、彼は、戦闘に行くときにはいつでもそれを持っていっていた。彼も、そして、その包みを最初に持っていた人間も、狼たちの夢を持っているといわれた。” We'gacapi は、Hethu'shka の社会に伝わる歌のなかに秘められた、勇気ある行為を持っているという榮譽をもっていた。その歌は、ポンカ族の人たち、そして、オマハ族の人たち、両方の社会の人たちに良く知られているものなのだ。



WE'GAÇAPI



STANDING BEAR

最近の歴史；個人の名前

次に掲げられているポンカの人々の名前は、1874 年の 11 月、この時には、部族のほとんどの人たちは、Niobrara 川の辺りに住んでいたのだが、その時に確認されたものである。a

その時点での全体の人口は、733 人で、次のような構成であった：b

	純潔の者	混血の者		純潔の者	混血の者
男	172	32	少女	129	45
女	164	21	家族数	185	32
少年	135	35			

人々は、三つの小屋に住んでいた。合衆国政府の行政官が管理する地域にあった村には、89 の家族、377 人の人が住んでいた。Hubthorn (“魚の臭いのする人たち”) と呼ばれて

a 1858 年にポンカ族は、彼らの狩猟地を合衆国政府に売却し、彼らの居住地として Niobrara 川の彼らが昔から住んでいた土地を確保した。かれらは、一度として合衆国政府と、あるいは、白人達と争いを起こしたことはなかった。彼らの保護居留区は、1865 年が再度合衆国政府から確認された。1868 年に広大な土地がスー族に対して与えられたが、その中には、Niobrara のポンカ族の保護居留区も含まれていた。ポンカ族は、この時、彼らの土地の行政的な移譲については無視されていた。1877 年に、ポンカ族は何の前触れもなく、インディアン強制居留区に移住するように伝達され、8 人の酋長たちは、行政官に指揮されてその地につれて行かれ、自分達の新しい保護居留区を選ぶように話された。この移住の理由について、抵抗する酋長達、あるいは、ポンカ族の者達には何の説明もされなかった。行政官とともに視察に行った酋長達は、この“見知らぬ土地に”自分達の村を選ぶことを拒絶した。そして、自分達を元の土地にもどしてくれるような嘆願した。それが拒絶されると、かれらは行政官を残し、冬のある日、極わずかの金と毛布を携えて、500 マイルの道のりを 40 日間もかかる、元の村への旅立ちをした。彼らが Niobrara に着くと、合衆国政府のインディアン局は軍を動員し、5 月の 1 日に、すべての部族のものを強制的にインディアン強制居留区に移住させた。涼しい土地から暑い土地に、そして、湿気の高い土地へ移り、この気候の変化が大変な苦しみとなった。そして、一年も経たないうちに、部族の 1/3 のものが死に、生き残った者たちもほとんどが病気にかかったり、動けなくなってしまった。Standing Bear (pl. 5) の息子も亡くなってしまった。父は、彼の死体を先祖のいた土地から離れた場所に埋葬することが出来ず、彼は、その骨を持ち、彼と彼に極近い彼に従うものたちは、“この暑苦しい土地”から引き返すことにし、1879 年の 1 月に、歩いて故郷を目指して旅立った。そして、5 月にオマハ族の保護居留区にぼろぼろの状態でたどり着き、生活をするために土地と、トウモロコシの種を貸してくれるように頼み、これが受け入れられた。そして、彼らがどうにか収穫の出来るときになり、軍隊が、Standing Bear と彼の一族を拿捕し、そして、彼らをまた強制居留区に連れ戻す指令を携えてやって来た。彼らは、無理やりそれに従わされた。彼らがまた南に戻る途中で、オマハ City の近くにキャンプを張った。彼らの話が知られるようになり、市民達は、これに関心を示し、法律家達が、救いの手を差し伸べることにし、人身保護令状がだされた。合衆国政府は、“インディアンたちは法律の定めるところの範囲に含まれる人間ではない”とのことで、この令状の告訴の、囚人としての権利を否定した。この裁判が、“インディアンも法律で守られるべき人々たちである。”、そして、合衆国法令のもとに、囚人達をインディアンの強制居留区に強制的に移住させる権威はないとの決断をした Dundy 判事の裁くところとなり、結局かれらの釈放の裁定が下った。冬になり、Standing Bear は、彼の一族の物語りを繰り返しながら、東部の重要な都市を訪ねまわった。そして、合衆国上院が、こうした事実が持ち出されると、ポンカ族の退去に関して詳しい調査をするように命じた。オクラホマの土地に残ることを選択したポンカ族の人たちは、こうして、とても良好な土地を与えられた。そして、彼らの Niobrara の地の故郷は、Standing Bear と、彼とともに行動した一族に保障され、失われた資産に対しての対価が払われた。1908 年の 9 月に、Standing Bear は亡くなり、彼は彼の父と同じ場所に埋葬された。彼の苦悩と勇気により、彼は、強制的なインディアンに対する退去の終焉を推進する手本となった。

b データは、インディアン部局委員会の事務所によりまとめられたものである。

いた村には 46 家族、144 人が住んでいた。また、“Point”といわれた村には、82 家族、248 人が住んでいた。

それぞれの“集団”を率いている 8 人の酋長がいた。こうした集団は、おそらく、その酋長が属している血族集団、もしくは、準血族集団からなっていた。

	家族	構成員
White Eagle's band (Waca'be.Hi'cada subgens) -----	26	89
Big Soldier's band (Waca'be, Hi'cada subgens) -----	31	97
Traveling Buffalo's band (Thi'xida) -----	23	72
Black Crow's band (Ni'kapashna) -----	28	90
Over the Lnad's band (Pon'caxti and Monkon') -----	21	73
Woodpecker's band (Washa'be) -----	27	75
Standing Bear's band (Wazha'zhe) -----	20	82
Big-hoofed Buffalo's band (Nu'xe) -----	9	22

個人の名前 ^a

WAÇA'BE 血族集団 HI' ÇADA 準血族	Mon'shonzhide—赤い羽根
White Eagle の一団	Mon'tega—新しい矢
男性	Ni'çtumonthin—後ろに歩く (O.: Xu'ka, Tha'tada)
Çi'ha—魂 (O.: Te'pa, Tha'tada, Tapa').	Nishu'dezhon—ミズーリ川の森林
Çithe'dezhinga—小さなかかと (O.: Inshta'-çunda).	Niwa'i—水を与える
De'monthin—歩きながら話をする。	Non'pabi—びっくりさせられた者 (O.: Waçabe, Tha'tada).
Gahi'ge—小さな酋長 (O.: Inke'çabe, Lon'çe).	Nudon'honga—指導者 (O.: Hon'ga)
Gaku'winxe—風で渦を巻く	Nudon'monthin—歩いている戦士
Gamon'xpi—風が雲を撃つ (O.: Wazhin'ga, Tha'tada)	On'ponçabe—黒いエルク
Gashta'gabi—殴られて、屈服させられた	Pe'degahi—Fire 酋長 (O.: Wazhin'ga, Tha'tada)
Ha'ugahi—イラクサの雑草	Shonto'nga—灰色のオオカミ
Ke'tonga—大きな亀 (O.: Wazhin'ga, Tha'tada)	Shu'degaxe—Smoke maker (pl. 6)
Mi'xazhinga—アヒル	Shui'na—意味不明 (O.: Waçabe, Tha'tada).
Mon'chu'nita—グリズリー熊の耳	Shuka'monthin—集団で歩くこと (O.: Hon'ga)
Mon'chu'wathihi—グリズリーを追いつ	Teçon'—白いバッファロー (O.: Wazhin'ga, THa'tada)
Mon'chu'zhinga—小さなグリズリー熊	Tenu'gaçabe—黒い牡牛
Mon'e'gahi—Arrow 酋長 (O.: Inke'çabe)	

a この名前は必ずしも完全なものではない。Ponca 族以外の部族に見られる名前は、()をつけられた、場所のはっきりした血族集団の人たちに随伴していた、それぞれに相当する部族の名前により追跡されている。(O. = Omaha.)



SMOKE-MAKER (SHU'DEGAXE)



GAHIGE

Thi'onbagigthe—光った稲妻 (O.; In'shta'- çunda)	Non'ba'monthin—走って旅する (O.; Mon'- thin'kagaxe)
Thi'onbatigthe—突然の稲妻 (O.; In'shta'- çunda)	Nudon'axa—戦闘を嘆く
Tide'gigthe—うなりながら近くを通る	Pahon'gamon'thin—早く歩くこと (O.; In'ke'- çabe)
Ti'uthion'ba—テントの中に稲妻が差し込む (O.; In'shta' çunda)	Shage'duba—四つのひずめ (O.; Tapa')
Wahu'tonthe—鉄砲	Shu'kabi—雲の塊
Wain'gabtha—毛皮を広げる	Taton'gapa—牡牛の頭
Wazhi'dathin—赤い薬を取る	Tenu'gaçka—白い牡牛
Xitha'çka—白いワシ (O.; Tapa')	Te'thiti—バッファローの肋骨 (O.; Waça'be, Tha'tada)
女性	Thi'tiata—肋骨のために嘆く
Mi'gashon'thin—運行している太陽 (O.; In'ke'çabe)	U'honzhinga—小さな料理 (O.; In'shta'- çunda)
Mi'texi—神聖なる月 (O.; Mon'thinka- gaxe)	Uzhon'ge—道
大きな兵士達の一団	Waça'bezhinga—小さな黒い熊 (O.; Waçabe, Tha'tada)
男性	Wakon'dagi—怪物
Agi'chidatonga—大きな兵士	Wazhin'ga—鳥 (O.; Wazhin'ga, Tah'tata)
A'hin'cja—白い羽 (O.; Te'pa, Tha'tada)	Wazhin'gaçabe—黒い鳥 (O.; Mon'thin'- kagaxe)
A'shkanonge—短い距離を走る人	Waxhin'gagahi—Bird 酋長 (O.; Wazhin'- ga, Tha'tada)
A'xewon—霧に包まれた	We'zhno'wathe—霧を起こす男
Gahi'ge—酋長 (O.; In'ke'çabe, Te'pa, Tha'tada), plate 7	Zha'beçka—白いビーバー
He'xude—灰色の角 (O.; Teçin'de)	Zhin'gapezhi—小さな悪餓鬼
I'kuhabi—恐怖を与える男	Zhon'xude—灰色の木
In'shta'duba—四つの目 (O.; Waçabe, Tha'tada)	女性
Ki'shtawagu—Pawneec 族の名前と言われ ている (O., Mon'thinkagaxe)	A'onwin—意味不明 (O.; Hon'ga)
Mon'hingahi—Knife 酋長	Mi'tena—意味不明 (O.; Hon'ga)
Mon'thumon'çe—Metal あるいは、鉄の 酋長	Mi'waçon—白い月 (O.; Hon'ga)
Nini'ba—パイプ (O.; Te'pa, Tha'tada)	Nonçeina'çe—意味不明 (O.; We'zhi'shte)
Non'ba'monthin—歩いている二人 (O.; Wa- zhinga, Tha'tada)	Teçon'dabe—白いバッファロー (O., Hon'ga)
	Teçonwin—白いバッファローの女 (O., Hon'ga)
	Ton'ingthihe—新しい月が突然現れること

(O..Inke'çabe)
 Zhoⁿi'wathe—木を運ぶ (O., We'zhiⁿshte)

 THIXIDA 血族集団
 旅するバッファロー—団
 男性
 Gaku'win^xe—急上昇しているワシ (O.; Tapa, Tha'tada)
 Ha'shimonthin—隊列の最後を歩くこと (O.; Insha'çunda)
 He'shathage—枝となった角 (O., Insha'çunda)
 Hewon'zhiⁿtha—一つの角 (Dakota)
 Hezha'ta—分岐した角 (O., Tapa')
 Hezhiⁿ'ga—小さな角
 Ka'xenonⁿba—二匹の刈らす(O., Hon'ga)
 Keba'ha—姿を見せた亀 (O., Tapa')
 Ma'azhiⁿga—小さなポプラの木 (O., Washiⁿ-Ga, Tha'tada)
 Mixa'çka—白鳥 (O., Mon'thiⁿkagaxe)
 Mon'a'zhiⁿga—小さなどて(O., Ingtho'ahide)
 Monchu'çka—白い熊
 Monshi'ahamonthin—上を動くこと (O., Insha'çunda)
 Nonbe'thiku—痙攣を起こした手
 On'pontonⁿga—大きなエルク (O., We'zhiⁿshte)
 Pa'thinⁿonⁿpazhin—Pawnee 出ないことを気遣う (O., Waçabe, Tha'tada)
 Sha'geçka—白い鉤爪 (O., Tha'tada)
 Sha'geshuga—太い鉤爪
 Sha'nugahi—意味不明 (O., Ingthe'zhide)
 Shathu'—ドク ドク流れる(水)
 Taton'ga—大きな雄の鹿 (旧い名前) (O., Tapa')
 Taton'ganonⁿzhiⁿ—立っている熊

Tenu'gazhiⁿga—二匹の雄のバッファロー (O., Tapa')
 U'don—良い
 Uga'shontonⁿ—旅する人、もしくは、放浪する人 (O., Teçinde)
 Waba'hizhiⁿga—小さな草を食べているもの(O., Kon'çe)
 Waça'betoⁿge—大きな黒い熊 (O., Mon'thiⁿ kagaxe)
 Wada'thiⁿge—酋長に対して帰属する (O., In'keçabe)
 Wami'—血(O., Kon'çe)
 Wanon'xe—幽霊
 Washi'chuçabe—黒い男 (Sioux)
 Washin'nuka—潤いのある脂肪、あるいは、新鮮な脂肪
 Waxhi'shka—貝殻 (O., Mon'thiⁿkagaxe)
 Washu'she—勇敢 (O., Inke'çabe)
 Wazhin'çka—知恵 (O., Inke'çabe)
 Wazhin'gaçi—黄色の鳥
 Wazhinⁿwathe—腹を立てている男
 Xitha'çka—白いワシ (O., Tapa')
 女性
 Mi'gashonthin—運行している月 (O., Inke'çabe)
 Mi'gthedonⁿwin—月が女を食い物にする (O., Inke'çabe)
 Mi'gthitonⁿin—新しい月に戻る (O., Inke'çabe)
 Mi'onⁿbathin—日々、動く月 (O., Inke'çabe)
 Mi'tena—意味不明 (O., Hon'ga)
 Nazhe'gitoⁿ—意味不明 (O., Hon'ga)
 Nonçe'inⁿçe—意味不明 (O., We'zhiⁿshte)
 Ton'ithin—新しい月の動き (O., Hon'ga)

Wate'wiⁿ—おそらく Wate の流れにちなんだ
もの (O., Tha'tada)

We'toⁿna—意味不明 (O., Insh^ta'ç^unda)

NI'KAPASHNA 血族集団

黒いカラスの一団

男性

A'kidagahigi—見守る酋長 (O., Tapa')

Çikoⁿxega—茶色の足首 (O., Inke'ç^abe)

Gahi'gewashushe—勇敢な酋長

Gahi'gezzinga—小さな酋長 (O., Kon'ge)

Gthedoⁿ'nonzhiⁿ—立っている鷹 (O.,
Washin'ga, Tha'tada)

Gthedoⁿ'xude—灰色の鷹 (O., Washin'ga,
Tha'tada)

He'çithiⁿke—新しい黄色の角 (O., Washin'
shte)

Hethi'shizhe—ねじれた角

Hin'xega—茶色の髪 (Omaha)

Hu'tontigthe—遠くで泣いている

I'bahoⁿbi—彼は良く知られている (O., Insh-
Ta'ç^unda)

Inchuⁿ'gaçka—白いイタチ (O., Tapa')

Kaxe'ç^abe—黒いカラス (O., Tapa') plate 8

Ke'zhiⁿga—小さな亀 (O., Ke'in, Tha'tada)

Mika'—アライグマ

Mixabaku—首の曲がったガチョウ (O., Ke'in,
Tha'tada)

Monchu'dathin—狂った熊

Mon'geutin—胸を打つ

Monhin'thing^e—ナイフのない (O., We'zhiⁿ-
shte)

Monno'utoⁿ—大地をひっかく

Mon'shkaaxa—ザリガニのために嘆く (O.,
Waç^abe, Tha'tada)

Monshoⁿ'çka—白い羽 (O., Ingthe'zhide)

Noⁿba'aton—二人を追及する

Noⁿ'getithe—近くを通りすぎる

Noⁿka'tu—青い背景 (O., Ingthe'zhide)

Nudoⁿ'gina—戦闘から戻る

Shoⁿ'gehinç^abe—黒い馬

Tatoⁿ'gamoⁿthin—歩いている大きな熊
(O., Tapa')

Ta'xtiçka—白い熊

Waç^e'zhide—赤い塗料

Wanoⁿ'pazhi—恐れることなく (O.,
Ingthe'zhide)

Zhinga'unç^a—小さな探りにいくもの

女性

Gthedoⁿ'shtewin—鷹の女 (O., Tapa')

Mi'gthedoⁿ'win—月の鷹の女 (O.,
Inke'ç^abe)

Mon'shadethin—高いところを動いている
者 (O., Insh^ta'ç^unda)

Ton'ingina—新しい月がやって来る
(O., Insh^ta'ç^unda)

PON'CAXTI 血族集団

大地を超えての一団

男性

Çin'deçka—白い尻尾 (Omaha)

Çom'dedoⁿka—ずんぐりした尻尾
(O., We'zhiⁿshte)

Çithin'ge—足の無い

Ezhnoⁿ'nonzhiⁿ—一人で立つ

Gthedo'texi—神聖なる鷹

Hon'gazhinga—小さな Hon'ga (O.,
Hon'ga)

Inke'tonga—大きな肩 (O., Insh^ta'ç^unda)

Insh^ta'pede—目を輝かす (O., Inke'ç^abe)



BLACK CROW (KAXE'ÇABE)



BIG GOOSE

PLATE 10



BUFFALO CHIP

Keon'hazhi—飛べない亀 (O., Waçabe, Tha'tada)
 Kigtha'zhonzhon—体を揺り動かす (O., Teçin'de)
 Mika'xage—泣いているアライグマ (O., Tapa')
 Mon'ka'ta—大地の上で (旧い名前、現在では、Dakota 族の間で使われている)
 Mon'kon'tonga—大きな藁
 Mon'zhon'ibahon—土地を知る
 Non'gethia—走ることのできない (O., Teçinde)
 Nuga'—男性 (O., Inke'çabe)
 Nuga'xte—男の元祖 (O., Wezhi'shte)
 On'pon'zhinga—小さなエルク (O., We'zhin'shte)
 Shenon'zhin—そこに立つ
 Te'monthin—歩いているバッファロー (O., Ingthe'zhide)
 Tenu'gawakega—病気の牡牛
 Thae'gethabi—愛されている者 (O., Tapa')
 The'baxon—潰された顎
 The'dewathe—振り返る
 THihie'non—試合で戦う
 Une'gtho'xe—毒を探す
 Waba'hizi—黄色の草をはむもの (O., Mon'thinkagaxe)
 Wagi'on—雷鳥 (Dakota)
 Washkon'zhinga—ちょっとした強さ
 Wa'xanon'zhin—前に立っている (O., Tapa')
 Xitha'gahige—ワシの酋長 (O., Tapa')
 Xitha'gaxe—ワシを生み出す人 (O., Tapa')
 Zhing'a'nudon—小さな戦士

女性
 Açe'tonga—意味不明 (O., Kon'çe)
 Gehedon'wintexe—神聖なる鷹の女 (O., Tapa')
 Mi'akonda—神聖なる月 (O., Teçin'de)
 Mi'bthiwin—意味不明 (O., Tha'tada)
 Mi'mon'shihathin—高いところを動いている月 (O., Tha'tada)
 Mi'tena—意味不明 (O., Hon'ga)
 Mi'waçon—白い月 (O., Hon'ga)
 Pon'ca'çon—白い Ponca (O., Mon'thinkagaxe)
 Zhon'in'wathe—木を運ぶこと (O., We'zhin'shte)
 WASHA'BE 血族集団
 キツツキー団
 男性
 A'gahamonthin—外を歩く (O., Waxu'ka, Tha'tada)
 Çin'deçabe—黒い尻尾
 E'thonthon'be—繰り返し現れること (O., Hon'ga)
 Hexa'gaçabe—黒いエルク
 Hexa'gamonthin—立っているエルク (O., Mon'thinkagaxe)
 Hin'çi'zhinga—小さな黄色い髪 (O., Teçin'de)
 Hu'bazhi—意味不明 (O., Tapa')
 In'shta'çabe—黒い目 (O., Teçin'de)
 In'shta'dathin—狂った目
 In'shta'duba—四つの目 (O., Waçabe, Tha'tada)
 Kon'çetonga—大きな Kansa 族
 Ma'çiton—一本だけのヒマラヤ杉
 Mi'kaçixthaha—痩せたコヨーテ
 Mi'xatonga—大きなガチョウ (pl. 9)

Mon'cedon—意味不明 (O., Ingthe'zhide)
 Monchu'ci'ndethinge—切り尾の熊
 Monga'azhi—弓矢を恐れない (O., Mon'-
 thinkagaxe)
 Mon'gazhinga—小さなスカンク
 Non'çon'dazhi—言い逃れをしない(O.,
 Tapa')
 Non'kaçka—白い背中
 Non'zhi'n'monthin—雨が移動する (O., Mon'-
 thinkagaxe)
 Nudon'honga—指導者 (O., Hon'ga)
 Paçi'duba—四匹のバッファロー—非常に
 古い名前 (O., Kon'çe;Osage)
 Sha'ge—ひずめ
 Shon'geçabe—黒い馬 (O., Tapa')
 Te'çehinçabe—バッファローの腹の黒い髪
 (O., Tapa')
 Te'nuga—雄のバッファロー (O., Hon'ga)
 Tezhe'bate—バッファローの糞 (pl.10)
 Te'zhinga—小さなバッファロー (O., In'-
 sthe'zhide)
 Thigthi'çemonthin—ジグザグに稲妻が走る
 (O., In'shta'çunda)
 Tishi'muxa—テントの柱を広げる (O.,
 In'sthe'zhide)
 Uga'shon'zhinga—小さな旅人 (O., Mon'thin'-
 kagaxe)
 Ugtha'atigthe—叫ぶ者 (勝利の名前)
 Uhon'non'ba—二人のコック (O., Wazhin'-
 ga, Tha'tada)
 Uhon'zhinga—小さなコック (O., In'shta'-
 çunda)
 Wahaxi—黄色い肌 (O., In'shta'çunda)
 Wahn'thing—孤児 (O., Teçin'de)
 Wa'inon'zhin—彼等の上に立っている (O.,
 In'sthe'zhide)

Wapa'de—死骸を切る者 (O., Tapa')
 Washkon'monthin—力強く歩く (O.,
 Wazhin'ga, Tha'tada)
 Zhinga'gahige—小さな酋長 (O., Tapa')
 Zhinga'washushe—小さな勇者

 女性
 Gthedon'wintexi—神聖なる鷹の女 (O.,
 Inke'çabe)
 Mi'gthedon'win—月の鷹の女 (O., Inke'-
 çabe)
 Migh'tonin—新しい月 (O., Inke'çabe)
 Mi'tena—意味不明 (O., Hon'ga)
 Mi'waçon—白い月 (O., Hon'ga)
 Mon'sha'dethin—高く動く (O., In'shta'çun da)
 Pon'caçon—青白い Ponca (O., Mon'thin'-
 kagaxe)
 Pon'cawin—Ponca の女 (O., Mon'thin'ka-
 gaxe)
 Wihe'tonga—成長した小さな姉妹 (O.,
 Wazhin'shte)

 WAZHA'ZHE 血族集団
 立っている熊の一团
 男性
 A'gahawashushe—勇敢で名高い (O.,
 Waçabe, Tha'tada)
 A'thiude—ふしだらな (O., In'shta'çunda)
 Bachi'zhithe—障害物を突き抜ける (O.,
 Tapa')
 Çighte'non'pabi—足跡がおそれられている者
 (O., Mon'thin'kagaxe)
 Da'donthinge—何も持っていない (O.,
 Kon'çe)
 Gaçube—意味不明 (O., Hon'ga)
 Gahi'gezzhinga—小さな酋長 (O., Inke'çabe)

Gakuwiⁿxe—高く舞い上がっているワシ
(O., Te'pa, Tha'tada)
Hexa'ga—荒々しい角 (O., Tapa')
Hon'gashenu—Hon'ga の男 (O.,
Insh^ta'çunda)
Inde'xaga—いかめしい顔
Ki'mon^hon—風に向かう (O., Insh^ta'çunda)
Kon'çehon^ga—Kansa 族の指導者 (O.,
Mon'thin^kagaxe)
Maci'kide—芽を出したヒマラヤ杉 (O.,
Insh^ta'çunda)
Monxhu'duba—四匹の熊、グリズリー
Monxhu'kinon^pabi—恐れられている熊
Monchu'nonzhin—立っている熊
Monchu'tonga—大きな熊
Monshtin'çka—白いウサギ (O., Wazhin'ga,
Tha'tada)
Ni'juba—僅かな水
Non'kahega—茶色の背中 (O., Tapa')
Nonon'bi—話に聞こえてくる者 (O.,
Teçin'de)
Nonpe'wathe—恐れられている者 (O.,
Wazhin'ga, Tha'tada)
Nonxi'dethinge—救いがたいこと
Nushia'haginon—曲がった低地を戻す
Pethi'shage—巻いたまゆ毛
Shon'gehinçin—黄色の馬
Tade'umonthin—動いている風 (O., Kon'çe)
Tai'hinton^ga—大きな鬣
Taton'ganonzhinzhinga—小さな立っている
牝牛
Taton'gashkade—遊んでいるバッファロー
(O., Teçin'de)
Tenu'gazhinga—小さなバッファローの牝牛
(O., Teçin'de)
The'çeçabe—黒い舌 (O., Inke'çabe)

Uçu'gaxe—道をつくる (O., Insh^ta'çunda)
Uzha'ta—合流
Waan'—歌うこと (O., Ingthe'zhide)
Waba'açe—敗走させる者 (O.,
Insh^ta'çunda)
Wabahi'zhinga—小さな一かじり (O.,
Kon'çe)
Wagi'asha—意味不明 (O., Insh^ta'çunda)
Wakon'da—能力 (O., Mon'thin^kagaxe)
Wanon'shezhinga—小さな戦士 (O.,
Insh^ta'çunda)
Washkon'hi—強い (O., Insh^ta'çunda)
Wahu'she—勇敢な (O., Inke'çabe)
Wa'thidaxe—かぎ爪の引き裂く音 (O.,
Wazhin'ga, Tha'tada)
Wathi'xekashi—長いこと追跡する者
Waxpe'sha—古い名前、意味は失われている
(O., Tapa')
Wazhe'thinge—感謝の念がない (O.,
Insh^ta'çunda)
We'ç'a—蛇 (O., Insh^ta'çunda)
We'ç'ahon^ga—蛇の指導者 (O., Tapa')
We'ç'aton^ga—大きな蛇 (pl.11)
We'ç'azhinga—小さな蛇 (O., Insh^ta'çunda)
Xitha'nika—ワシ集団の人 (O., Tapa')
Xitha'zhinga—小さくワシ (O., Te'pa,
Tha'tada)

女性
Açe'xube—神聖なる塗料 (O., Wazhin'shte)
Mi'tena—意味不明 (O., Hon'ga)
Nonçe'inçe—意味不明 (O., We'zhin'shte)
Nonzhe'giton—意味不明 (O., Mon'thin^ka-
gaxe)
Ta'çabewin—黒い鹿の女 (O., We'zhin'shte)



BIG SNAKE



OSAGE CHIEF

PLATE 13



Te'coⁿwin—白いバッファローの女 (O.,
Teçin'de)

Ton'ingthihe—高く上る新しい月 (O.,
Inke'çabe)

Umon'hoⁿwau—Omaha 族の女

Wihe'toⁿga—成長した小さな姉妹 (O.,
We'zhin'shte)

NU'XE 血族集団

大きなひずめのバッファロー—団
男性

Bthon'ti—風で運ばれてきた臭い (O.,
We'zhin'shte)

Çin'dethihon—尻尾を上げる (O., Teçin'de)

Du'bamonthin—歩いている四人 (O.,
Inke'çabe)

Insha'gemonthin—歩いている老人 (O.,
Inshat'çuⁿda)

Inshat'baçude—目の周りの毛を取り除く
(O., Hon'ga)

Non'gethia—走ることができない
(O., Teçin'de)

Nu'xezhinga—小さな氷

Pahe'agthin—丘の上の場所

Pude'tha—意味不明 (O., Inke'çabe)

Sha'bemonzhiⁿ—陰気に立つ (O., Hon'ga)

Shonge'çka—白い馬 (O., Mon'thiⁿkagaxe)

Tenu'gagahi—男のバッファロー酋長 (O.,
Wazhin'ga, Tha'tada)

Tenu'gashagetonga—大きなひずめの雄牛

Thae'gon—みじめな

Uhon'gemonthin—隊列の最後を歩く (O.,
Ingthe'zhide)

Uhon'genonzhiⁿ—隊列の最後に立つ (O.,
Ingthe'zhide)

Uki'paton—自分で転がっている (O.,
Ingthe'zhide)

U'shkadazhi—大胆な (O., Mon'thiⁿka-
gaxe)

Uthi'xide—あたりを見回す (O., Inke'çabe)

Uzhna'gaxe—はっきりとさせる (O.,
Teçin'de)

Waça'apa—意味不明 (O., Waçabe,
Tha'tada)

Waça'bezhinga—小さな黒い熊 (O.,
Waçabe, Tha'tada)

女性

Mi'mite—意味不明 (O., Inke'çabe)

We'tonⁿa—意味不明 (O., Inke'çabe)

オセージ族、あるいは、WAZHA'ZHE 部族 ^a

最近の歴史 ; 社会の組織

オセージ族は、五つの血縁関係で結ばれた集団から出来ていて、そのそれぞれが、沢山の準血族集団から成り立っている。こうした、準血族集団には、Sho'ka — 特定の儀式に奉仕したり、あるいは、参画する人たち、として行動することに関連した集団がいるようである。五つの血縁関係にある集団のうちの二つの集団は、いつも決まって、部族の作る円陣の東側にある玄関部の北側のところにキャンプを張っていた。のこりの三つの集団は、その

反対側に陣取っていたが、しかし、その相対的な位置関係は必ずしも決まったものではなかった。そういうわけで、部族は、二つの敷地を持っており、一つは、二つの血族集団が占める北側の場所、そして、残りは、三つの集団が占める南側の場所に分かれていた。

a オセージ族の人々は、現在は、オクラホマの北部に、アーカンソー川の周辺に住んでいる。この地域は、彼らが最初に白人たちに出会ったときは彼らの故郷ではなかった。彼らは、当時は、ミシシッピ川の西側の地域に、オザーク山地を含むミズーリ川の北側と南側の地域、このオザークというのは、原住民の言葉の *Wazha'zhe* のなまった言葉であるが、ここに住んでいた。オセージ族が住んでいた場所、つまり、ミシシッピ川の沿岸地帯というのは、西部を目指していた白人達にとっては、すぐにでも手に入れた土地であった。オセージ族は、彼らがミシシッピ川を離れたときの、1808年の最初のとき以来、合衆国政府に何度も彼らの土地を割譲してきた。そして、1818年には、彼らは、アーカンソー川とバーディグリス川沿いの彼らの土地の権利を断念した。1835年に、彼らは、ミズーリ州とアーカンソー州の彼らの土地すべてを売却した。さらに、1839年、1865年にも土地の売却がなされた。こうして、最終的には、1871年と、1872年には、土地がインディアン強制居留区にいたチェロキー族によっても買われて、今日、オセージ族の人々が住んでいる形の土地となった。ミズーリ州、カンザス州の彼らにより売却された土地の代金は、利子をつけて合衆国政府の財務省に支払われ、その額がまとまり、オセージ族の人々は食料や衣料のために働かなければならないような緊急事態からは解放されている—当然のことながら、これは、強く、そして、前途有望な部族の、もっともすばらしい発展に必ずしも好ましいものではないような状況ではあるが。(オセージ族の酋長達の写真が、pls. 12,13,15 に示されている。)

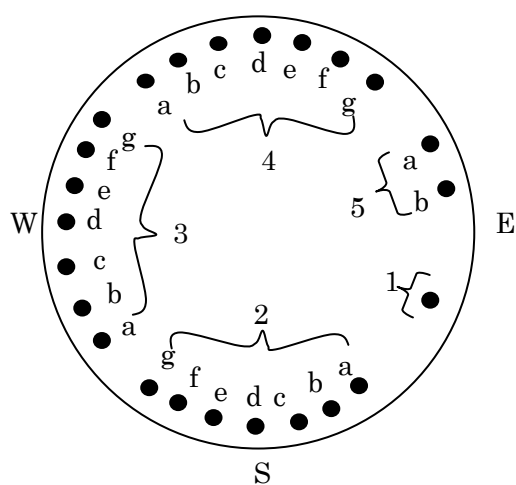


Fig. 9

この南側の場所に陣取っている三つの集団の位置の相互関係に従い、部族の円陣には、三つの形、*tsi'utluga* と呼ばれていたが、があった。(figs. 9–11 参照) そして、これは、ちょっとしたうまい発音の違いはあるが、オマハ族の *hu'thuga* と同じものである。さらに、オセージ族の円陣の場合には、オマハ族のときと同じように、対照的な形をしていて、実際の出入り口は、部族が移動していた方角に向いて開かれていた。キャンプの形とか、部族の社会を表現しているような基本的な考え

方のなかに顕著な類似性があったということは、こうした二つの部族が、同じような構想で組織されていたことを示しているように思われる。(p 138 参照)

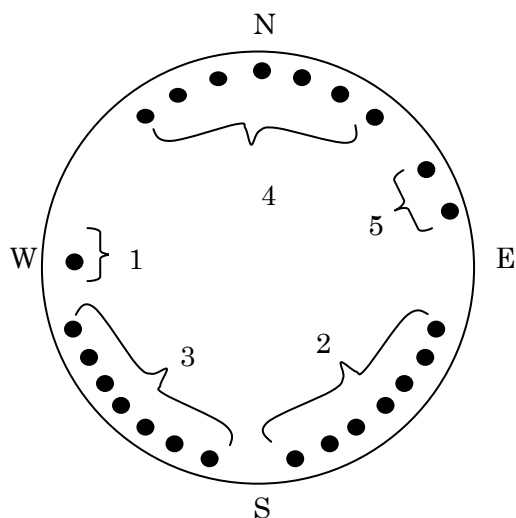


Fig. 10

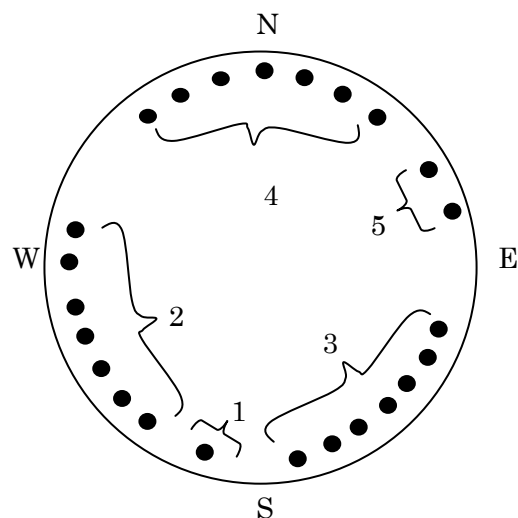


Fig. 11

Fig. 9 オセージ族の hu'thuga の配列 — 通常の序列。1. HO^NGA UTANATSI (pp. 58—59). 2. WAZHA'ZHE (p. 50). 準集団 (a) Wazha'zhecka; (b) Ke'k'lⁿ; (c) Mlke'estetse; (d) Wa'tsetsi; (e) Uzu'gaxe; (f) Taihihi; (g) Hu zhoigara. 3. HO^NGA (p.60) 準集団 (a) Waca'batoⁿ; (b) Iⁿgron'ga zholgara; (c) Opxon; (d) Mon'iⁿkagaxa; (e) Pon'ca washtage; (f) Xi'tha; (g) I'batsetatse. 4. TSI'XHU (p. 60) 準集団 (a) Tal'shu wanoⁿ; (b) Sin'tsagre; (c) Pe'toⁿtoⁿga zhoigara; (d) Tseto'ga iⁿtse; (e) Mik'ln wanon; (f) Hon shoigara; (g) Tsizhu uthuhage. 5. NI'KA WAKO^NDAGI or GRON'I^N (p. 60—61). 準集団 (a) Xon'tsewatse; (b) Nu'xe

Fig. 10 オセージ族 hu'thuga の配列—狩のときの序列 2. WAZHA'XHE. 3. HO^NGA 1. HO^NGA UTANATSI 4. TSI'ZHU 5. NI'KAWAKO^NDAGI or GRON'I^N 黒丸は fig.9 のものと同じ準集団の序列を示している。

Fig. 11 オセージ族 hu'thuga の配列—神事のときの序列 3. HO^NGA 1. HO^NGA UTANATSI 2. WAZHA'XHE. 4. TSI'ZHU 5. NI'KAWAKO^NDAGI or GRON'I^N 黒丸は fig.9 のものと同じ準集団の序列を示している。

血縁関係集団^a

- | | | |
|--|---|---------------------|
| 1. HON'GA UTANIATSI | } | Hu'thuga の南半分を占めている |
| 2. Wazha'zhe | | |
| 3. Ho ⁿ ga' | | |
| 5. Ni'ka wako ⁿ dagi or Gro ⁿ i ⁿ | } | 北、半分を占めている |
| 4. Tsi'zhu | | |

^a 名前や、仕事、そして、血縁関係集団の位置に関連してここで与えられている情報は、部族の一員である次のような人たちからもたらされたものである: Shon'toⁿcabe, Wazha'zheadalⁿga, Wahiⁿha (pl. 14). ならびに、Big Heart.の人たち。



WASHIN'HA (OSAGE)

1. HON'GA UTANTSI (THE SEPARATE HON'GA) 集団

この名前のもつ意味と、その特徴は、すでに述べたとおりである。(P. 40. 参照) Hon'ga utanatsi は、“儀式を指導する人” という意味で使われている。

準集団：Moⁿhiⁿci (“石製のナイフ”).^a この集団は、Hon'ga utanatsi の sho'ka、あるいは、従者といわれる人たちであった。この役割は、儀式を取りしきる人たちと、その儀式のなかで仕事をする人たちとの間を取り持つという、非常に名誉ある仕事であった。

2. WAZHA'ZHE 集団

この集団の名前は、非常に古く、現代の言葉でこれに相当するものはない。この集団は、七つの準集団に分かれていて、その夫々が特徴ある名前をもつ、sho'ka の従者集団であったが、そのどれもが、一般的な Wazha'zhe という名前を使う権利を持っていた。

準集団

(a) Wazha'zhe cka (“純白の”とか、“生粋の Wazha'zhe”)；cka というのは、オマハ族の“本来の”とか、“純血の”という意味の xti に相当する、オセージ族の言葉である。この集団は、部族の中での平和を維持するための七つのパイプの保管である。Ingroⁿga ni montse (“湖の中のピューマ”)というのは、Sho'ka のさらにそのなかのある分属の名前である。

(b) Ke'k'in (“偉大なる亀”)

Pak'a zhoigara (paka, 神秘的な；zhoigara、とともに存在する人々、など、彼等の儀式がこれに関連していた人々) Sho'ka 分属

(c) Mike'estetse, 猫の尻尾 (Typha latifolia).

Ka'xewahuca, 大きな泣き声のカラス、b Sho'ka 分属

(d) Wa'tsetsi. 彗星が明けの明星から落ちてきて、この準集団の会合に加わったと言いつた。Xutha'pacoⁿ zhoigara (xutha'pacoⁿ、ハゲワシの意) Sho'ka 分属

(e) Uzu'gaxe b (uzu' 真っ直ぐな；gaxe 為す一道を真っ直ぐに作る人たち) この集団の人たちの仕事は、戦闘に行くときの道をきちんとすること；障害物があれば、安全にこれを回避する道を見つけること。戦闘集団のなかの斥候は、この集団の中で実行されていた。

a 過去における実用の品々は、人々の間での日常生活の中ではなくなってしまうていたけれども、それらは、儀式のなかではよく保管されていた。たとえば、石製のナイフというのは、儀式のなかで使われていた唯一のナイフであるし、Inahita'cuⁿda や We'shiⁿshte といった集団に属していた儀式と結びついた世襲的な任務をもったオマハ族の家族の間の個人的な名前として、その名前をみることができる。

b この分属の名前を、オマハ族のなかの個人の名前になかにみることができる。

Monso'tsemonⁱⁿ (moⁿ, 大地 ; so'tse 煙; moⁿin 歩いていくこと—煙、霧、そして、誇りの中を行進していく人たち) Sho'ka 分属で、戦闘集団が行進するのを隠すために霧を起こしたり、埃を舞い上げたりする風を呼び起こす集団で、このように呼ばれていた。

(f) Tathi'hi, 白い尾を持つ鹿

Watsi'tsazhi^{ga} zhoigara (watsi'tsazhi^{ga} 小さな動物の意) 分属

(g) Hu zhoigar (hu, 魚の意) Enoⁿmiⁿtse toⁿ (enoⁿ, 彼等だけと言う意 miⁿtse 弓; toⁿ 持っている、あるいは、保持している— 彼等だけが弓を持っているという意味) Sho'ka 分属 彼らは弓の製作者達として知られていた。

3. HON'GA (指導者たち) 集団

この血族集団も次にかかげるような七つの準集団に分かれていた。

(a) Waca'be toⁿ (waca'be , 熊; toⁿ 保持すること)

Waca'be cka (“純白な” もしくは、“本来の熊”) Sho'ka 分属

(b) Ingroⁿ'ga zhoigara (ingroⁿ'ga, ピューマ)

Hiⁿwa'xaga zhoigara (hiⁿwa'xara ヤマアラシ) Sho'ka 分属

(c) O'pxoⁿ, Tahe'shabe zhoigara (tahe'shabe 黒光りの角を持った雄鹿) Sho'ka 分属

(d) Mon'inkagaxe (moⁿin^{ka} 地球; gaxe つくること— 地球の創造者

(e) Poⁿca washtage (washtage 平和) この集団の人たちは、平和を作る役割をにっていた。

(f) Xitha (“白ワシ”)

(g) Hoⁿ'gahsinga (“小さな Hoⁿ'ga ” I'batsetatse (ibatse とともにやってくる; tatse 風一風に関連した儀式に結びつけられた人たち) Sho'ka 分属 伝達の仕事はこの人たちのものであった。

4 TSI'ZHU (HOUSEHOLD) 集団

この血族集団もやはり七つの準集団を持っていた。

(a) Tsi'zhu wanoⁿ (wanoⁿ, 最も古い ; 年齢が知恵をもたらす) ないしは、Wahoⁿ'da nopabi (wakoⁿ'da 神々 ; noⁿpabi 懸念する) .

Waba'xi, Sho'ka 分属

(b) Sin'tsagre (“頭の髪に狼の尻尾をつけた”)

Shoⁿ'ke zhoigara (shoⁿ'ke 狼) Sho'ka 分属

(c) Pe'toⁿ toⁿga zhoigara (pe'toⁿ 鶴 ; toⁿga 大きな)

(d) Tseto'ga iⁿtse (tseto'ga 雄バッファロー ; iⁿtse 顔) Waba'xi が、獲物を探しに行ったといわれている。彼はバッファローを見つけ、その顔に指を当て、バッファローを殺した ; Wakoⁿ'da は、その行動で自分を咎めた。この行いで、かれに従う人々は、Buffalo-face の人々と呼ばれた。

Tsea'koⁿ, Sho'ka 分属

(e) Mi'k'iⁿ wanoⁿ (mi 太陽 ; k'iⁿ 運ぶ ; wanoⁿ 最も年寄りの人)

Tsi'zhu washtage (washtage 平和の) 分派 この分派の人たちは、平和を構築していた。
Red-eagle の人たち。

(f) Hoⁿ zhoigara (hoⁿ 夜)

Ta'pa zhoigara (ta'pa, Pleiades の名まえ) Sho'ka 分属

(g) Tsi'zhu uthuhage (uthuhage 最後の) 最後の居住者とは、この一連の集団の終わりという意味に相当している。

5 NI'KA WAKOⁿDAGI あるいは GRONIN 集団

この血族集団は、三つの準集団を持っていた。 (名まえの由来 ; Ni'ka 人々 ; wakoⁿdagi 雷に関連したもの —ここから、雷の人々)

(a) Xon'tsewatse (xon'tse, ヒマラヤ杉 ; watse 敵を攻撃するときなどに、触れること)。 この名前は、雷が落ちてくるときに一時的に留まるとされたヒマラヤ杉の木に。ちなんだものである。

この準集団は、Thunder の人々の儀式のときには、その従者としての行動をとっている

(b) Nu'xe 氷 これは、この世の天界から来た人たちの名前である。ある 1 人の男がこの世に下りてきたときに、“あなたはどなたですか？”と尋ねられた。そこで、彼は、こう応えた。“私は Nu'xe、氷もしくは雹の意、ですよ。”と。

準 Shoka の集団、Tseto'ga zhoigara (tseto'ga 雄バッファロー)。

オセージ族のなかのこの二つの分派は、Tsi'zhu ならびに Hoⁿ'ga と呼ばれていた。Tsi'zhu は、二つの血族集団から成たっていて、東の方角に出入り口を持つた部族の円陣の中の北側に居を構えていた。オセージ族の Thunder 集団の位置は、オマハ族の Iⁿshta'cuⁿgda、この集団の名前と儀式は、雷に関係していたが、この集団が占めていた場所と非常に良く似ており、Tsi'zhu 分派は、オマハ部族の円陣の北半分に象徴されているような概念に相当する役割分担を持っていたようである。 (p. 138 参照)

Hoⁿ'ga の分派は、三つの血族集団から成たっていた。 58 ページに描かれたような配列の形で与えられたこの人たちは、ほかの人たちとの相関関係をもったその位置が部族の儀式や行事のなかで変化することはあったが、Tsi'zhu 分派との関係は、その位置は常に一定のものであったことを示している。オセージ族の配置の決められた円陣の南半分に見られるような位置とその役割分担が、オマハ族のこれに相当する分属の人たちのものとの間で、似たような関係が存在しているということは、両方の社会が共通の様式と原点を持っている可能性を強く示している。

ポンカ族の場合には、綿密に組織化された形態のなかの相互の関係は存在していないけ

れども、オセージ族の Nu'xe 集団の役割と比べてみたとき、それとポンカ族の Nu'xe の集団のもつ役割の類時性は、これら二つの部族における考え型や信仰のなかに間違いなく共通性のあったことを教示している。

ADOPTION CEREMONY

(養子縁組の儀式)

オセージ部族への養子の儀式が、オセージ集団の機能と象徴に光を投げかけている。このことについて、年老いたある酋長が次のように述べていた：

戦闘集団が捕虜を捕えると、子供を失ったものとか、子供のいないものたちの誰もが、自分の空虚を埋めるためにその捕虜を養子として受け入れることが出来た。この儀式が済むと、その人はすべてのことについて、かれが、部族の中で生まれたものとしてオセージ族の人間になった。そして、彼が、新しく誕生した形で入っていった家族の役割と、家族として求められた仕事をすることとなった。

捕虜がこの養子縁組のために身柄を拘束されているときに、養子縁組をしようとする者は、Tsi'zhu washtage の指導者、彼は調停者であったが、その彼と、そして、戦闘の儀式を取り仕切っていた Ingro'ga の酋長に対して招待状を送った。そして、こうした指導者たちに対して祝宴を準備し、料理が差し出されると、その主人が厳粛な話かたで、その捕虜を養子としてうけ入れたいという要望を申し出た。すると、この指導者たちは、その儀式を取り行うことになっていたグループのなかの、その儀式に非常に経験が豊かな指導者たちを迎えに行かせた。その人たちは、Nu'xe、氷； O'pxoⁿ、鹿； I'batse 風； Wa'tsetsi 水；そして、部族で出かける狩の指導者であった Hon'ga であった。そして、こうした人たちがすべて集合すると、その捕虜が連れてこられて、その小屋の入口の反対側の、後ろのところにあった、よそ者の場というところに座らされた。その後、部族のなかで生まれた子供に誕生の儀式と名前を授ける儀式が執り行われた。この儀式は、部族の創造と歴史、そして、男達の生涯の中での四つの段階を詳しく述べている。この儀式の終わりで、捕虜のものは、Tsi'zhy washtage の酋長のところに連れていかれ、次のこの酋長は、部族の円陣のなかで南の側に位置している Ingro'ga のところに捕虜をゆだねた。この行動により、捕虜は、平和の維持を司どる北の場所に位置するものたちを通り、戦闘の任務についている南側の人たちのところにと、象徴的に部族の円陣の中を次々のまわっていった—この行動は、部族の中にあるすべての習慣をかれが共有しているのだということを言い表すものであった。

そのあと、Ingro'ga の酋長が、鋭く尖った火打ち石でできたナイフを取り出し、これで、捕虜の鼻の先を、血が流れだすように、すばやく一掻きした。Tsi'zhu washtage の酋長がその血を拭きとった。そして、Wa'tsetsi の酋長が水を、Hon'ga の酋長は食べ物を(トウモロコシ、または、肉) を運んできて、これらが、Tsi'zhu washtage の酋長により捕虜の前に揃えられ、この酋長は、その後、神聖なるパイプを取り出し、これにタバコを積めると、その上に、I'batse が運んできたヒマラヤ杉の葉を乗せた。そして、このパイプに火が付けられて、それを捕虜が形式的に吸った。その次に、Nu'xe の酋長がバッファローの脂肪を運んできて、その捕虜の体に塗りたぐり、ついで、O'pxoⁿ の酋長が捕虜の顔の左の眉毛のところから、右の頬の下にかけて、二本の黒い筋を描いた。これがすむと、Tsi'zhu washtage の酋長が Ni'wathe (“命を授かった”) という名前を公にし、そして、その捕虜は、彼を養子として向かえる人の子供となった。

血を流すというのは、その捕虜が生まれた部族の血と、彼の部族のなかの血縁関係を絶ち切るということ象徴していた。その血を **Wa'tsetsi** が洗い去ることにより、彼の以前の生まれたときからの形跡のすべてが取り払われた。彼は、食料を手に入れることができた狩のときに部族の指導した人からご馳走を与えられた。オセージ族の食べ物により作り出された新しい血とは、こうして、オセージ族の血により作り出されたものであった。

この象徴的な行動は、**I'batse** により用意された芳香を持ったヒマラヤスギを使ったタバコをパイプで吸うということにより、権威付けられ、そして、神聖化されていた。最後に、**Nu'xe** (彼等は、**Buffalo** 手段の人たちと一緒にトウモロコシの作付けを管理している人たちであったが) が、捕虜の体に油を塗布することで、その捕虜は、部族の中の日常の習慣と、そして、仕事の役割のなかに完全に組み込まれるということになった。**O'pxoⁿ** により、黒い筋が付けるということは、戦闘における守り神としての雷と、そして、その捕虜のものの、部族のなかでの戦士としての将来を約束するものであった。**Ni'wathe** という名前を授けることで、この儀式の終了が告げられ、そして、この一連の行事が閉じた。

その儀礼は、彼の生まれた部族の人たちに対してだけでなく、彼のそれまでの過去からの離別を意味し、そして、かれを保護し、“彼を養子として受け入れることで”、“生まれ変わらせた” その、オセージ族の家族の一員として、蘇えさせるという意味を持っていたとも言われていた。

その儀式の終わりには、この儀式のなかで役割を担った夫々の酋長達は、捕虜を自分の養子として迎え入れた男がそのために準備をして祝宴によばれ、ご馳走をともした。その後まもなく、**Ni'wathe** の名前が授けられ、そして、そのあとは、儀式はなく、養子となった子供には彼の父親の集団に付随する名前が与えられた。

伝説的につたわる言われ

今日の部族の社会組織

(**Black Dog. Pl.15** に夜もの)

Wazha'zhe の血族集団は、七つのパイプを持っていた。これらは、いずれも部族のなかの平和を維持するために使われていた。もし、諍いが起きたときには、これらのパイプの 1 つが、**sho'ka** の使い手により送られ、そのややこしいな事件は、友好的に納められた。

Wazha'zhe のものが **Ho'ga** に出会ったときには、彼らは、これらの平和のパイプの 1 つの力で理解しあい、ひとつの気もちになった。彼等は、1 つの集団になったあと、**Ho'ga utanatsi**、彼等は彼等独自のパイプを所持していたが、この人たちに出会った；しかし、お互いに理解し、**Hon'ga utanatsi** は、**Wazhaa'zhe**、そして、**Ho'ga** の人たちと同化した。こうしたことがあったあと、この三つの集団の人たちは、**Tsi'zhu** と出会い、そして、彼らとも一緒にの集団となった。

Big Heart やそのほかの人たちの話によれば、五つの集団は夫々が独自の伝統を持っており、お互いが、ほかのものに対して干渉するようなことはなかった。

WAZHA'ZHE の集団

ずっと昔、(“ずっと、ずっと、その昔” と似たような意味) **Wazha'zhe** のある集団



BLACK DOG AND OTHER OSAGE CHIEFS

左端が Black Dog (sho'to'nqabe)

が天界に住んでいた。彼等は、自分たちの生まれ、彼等が何処からやってきて、この世に存在しているのかを、そのいきさつを知りたいと思った。彼等は太陽のところに行った。すると、太陽は、お前さんたちは私の子供だと言った。そこで彼等は、さらに遠くまでさ迷い、月のところまでやってきた。彼女は、お前さんたちを産んだのは私で、太陽がお前さんたちの父であると説明した。そして、彼女は、彼等に、今住んでいるところを後にし、地球に行き、そこに住むように言った。そこで、彼等は地球に降りて行ったが、ところが、その時、地球は水で覆われていたのだ。かれらはもはや自分たちが立ち去った元の場所に戻ることができず、そこで、彼等は嘆き悲しんだが、しかし、何処からも何の返事も帰ってこなかった。彼等は、空中をさ迷い、そして、どこかの神が助けてくれることを願い、あらゆる方向に向かい、救いを求めた；しかし、何処にもその救いを見つけることが出来なかった。動物達が彼等とともにいたが、エルクが、それらの仲でも最も素晴らしく、そして、最も落ち着いており、そして、すべての生き物にたいして、自信を持って元気づけていた；というわけで、彼等はエルクに対して何とかしてくれるように訴えた。そこで、彼は、水の中に飛び込み、そして、水中に沈んでいった。それから、彼は、風に呼びかけると、風があらゆる方角からやってきて、そこにあった水が、水滴となってなくなるまで吹き飛ばした。その時以前に、風は、北から南へと、そして、その逆に、南から北へと、僅か、二つの方角からだけしか吹くことはなかった；しかし、エルクが彼等に呼びかけると、彼等は、東から、北から、西から、そして、南からもやって来て、そして、彼等はその中心点^aでお互いに出会い、その水を舞い上げたのだ。

最初に岩だけが現れ、人々は、何の植物も生えていないその岩の上を歩き続けて行き、そこでは、何の食料も手にすることはできなかった。やがて、柔らかい大地が出てくるまで、雨が降り続いた。こんな風になると、喜んだエルクは、その柔らかい大地を駆け回り、そして、彼の抜け出た毛が大地に貼りついた。その毛が成長して、そこから、豆の実がなり、トウモロコシが、ジャガイモが、そして、野生のカブが生まれ、ありとあらゆる草が、そして、樹木が育っていった。

その人たちは、さらに大地を旅し、彷徨っている間に、人間の足跡をみつけ、その跡をつけていった。そして、彼等は、自分たちのことを **Wazha'zhe** と呼んでいる人たちに出会った。**Hon'ga** と **Elk**^b の人たちは、彼等と友達になり、そして、ともに、食料を求めて旅をした。こうして、旅をしている間に、彼等は、今度は **Hon'ga utanatsi** と出会った。**Wazha'zhe** は、一本のパイプを持っていた。そこで、かれらはこれにタバコをつめて、**Hon'ga** に差し出すと、彼等はこれを受け取り、こうして、**Hon'ga utanatsi** は、この三つ

a **Hon'ga** 集団の中の(g)の **Sho'ka** の準集団の **I'batsetatse** (“ともにやってくる風”)と言う名前に注意していただきたい。

b **O'pxon** ないしは、**Elk** は、**Hon'ga** 集団の(c)の集団である。この伝説の中での人々の名前として **Hon'ga** という言葉の使い方は、すでに pp40 – 41 で指摘されているようなものに関連していることに注意されたい。

c **Wazha'zhe** 集団のなかの **Wa'tsetsi** という準集団(d) p. 59.

の合同集団の一員として迎えられた。やがて、彼等は、Tsi'zhu と出会い、彼等も、七つの血族がいたが、これらがすべて仲間として加わることとなった。

HON'GA 集団

Hon'ga は、天上界からやった来たが、彼等が地上に来て見たのは、水に覆われた大地であった。そこで彼等は、彼等を救い、水を吹き飛ばしてくれる神を求めてありとあらゆる方角に飛んでいった；しかし、彼等は何も見つけることが出来なかった。すると四方に向かって大きな声で叫ぶエルクがやって来た。その彼の鳴き声に応えるかのように、四つの方角から風が巻き起こったのだ。そして、水を吹き飛ばすと、水位がみるみるうちに下がり、やがて岩が現れてきた。その岩の上に人々がたつことは出来たが、しかし、それは十分ではなかった。ニオイネズミが水のなかに送り込まれたが、彼は溺れてしまった。その次には、水もぐり鳥が送り込まれたが、しかし、彼もまた溺れてしまった。今度はビーバーが送られたが、やはり、彼も溺れてしまった。次に、ザリガニが水のものにもぐって行き、そして、彼が戻ってくると、彼の爪に沢山の泥が付いていた。がしかし、彼は、疲れ切って死んでしまった。ところが、この泥から、大地が作られたのだ。

WA'TSETSI 集団

夜空の星たちは、太陽と月の子供達と信じられていた。Wa'tsetsi^cの人たちは、丁度隕石などと同じようにこの大地に降りてきた星で、それが、人になったのだといわれていた。

海の中の人々

海的那こから来たという人たちがいる。海的那こに住んでいる彼等は、下に向いて吊り下がるような格好をした、緑色の、そして、茎に葉のついた植物の中に住んでいた。その人たちは、水の中で住んでいた人々は、水を吐き出しながら、囲ってくれることで、彼らを水から守ってくれる貝的那こに住んでいた。

大地の下にも、クーガーや熊、バッファロー、そして、エルクのような生き物がいた。こうした動物達が、地中から、この大地に出てきた。この大地の生物と、そして、貝的那こで生活をしていた人たちが、大地にやって来たとし、また、星の人たちも地上に降りてきた；そして、こうした生き物、人たちがみんな一緒になり、お互いに交配しあい、この共同体から、今日の人たちが生まれたというわけだ。

Hon'ga 分属の男達は、髪を切り、前から後ろにかけて五つの房の筋をつけなければならない。

Tsi'zhu 分属の男達は、髪を三つの房をつけている—1 つは、頭の前のところ、そして、頭の天辺に 1 つ、残りは、首筋のところである。

^c Wazha'zhe 集団のなかの Wa'tsetsi という準集団(d) p. 59.

個人の名前

次のようなオセージ族の名前が 1896 年に得られた。

TSI'ZHU WASHTAGE (PEACEMAKERS' HOUSEHOLD)

A'buzhi^{ne}—小さな羽根

Blo'ahike—すべての酋長

Bpabaxoⁿ—頭を切る。戦闘にちなんだもの。頭を切り落とす

Dhoⁿ'tsewahi—骨抜き of 心臓 (O., Tapa')

Dton'woⁿgaxe—村をつくる人 (O., Moⁿ'thiⁿkagaxe)

Dton'woⁿihi—戦闘にちなんだもの 戦士が村人を逃げ出させる

Gahi'geste—背の高い酋長 (O., Inke'çabe)

Gahi'gkiwasainga—人々を支配する酋長の力 (O., Moⁿ'thiⁿkagaxe)

Gka'washinka—小さな馬

Gkoⁿ'saⁿoⁿbawahri—二人のカンザ族を殺す。戦闘の名前

Gkoⁿ'sawatainga—*Gkoⁿ'sa*, Kansa 族; *wataiⁿga*, 風変わった 古い言葉

Greson'shinka—小さな鷹 (O., Tha'tada)

Greⁿzhe'ruse—戦闘の名前 バラバラの馬をとらえる

Haxu'mizhe—女の名前. Ropes

Hoⁿwa'saope—戦闘の名前 悲しんだ後で戦闘に向かっていく

Hua'shutse—赤いワシ

Inⁿshta'mon^{ze}—*Inⁿshta'*, 目; *mon^{ze}*, 胸のように突き出る (O., We'zhiⁿshte)

Moⁿ'hogrimoⁿkasabpe—土手の近くに座っている 村の場所にちなんだもの

Moⁿ'kasabe—黒い胸 エルクにちなんだもの

Moⁿ'zeⁿoⁿopiⁿ—鉄の首飾り

Moⁿ'zhakita—(*Moⁿ'zha*, 大地; *kita*, 見渡す—あたりを見渡す) 風にちなんだもの
(O., Koⁿ'çe)

Moⁿ'zhakuta—(*Kuta*, 撃つ; 土地を守る、あるいは、撃つ) 風にちなんだもの
(O., Kansa)

Ni'wathe—住むようにする (養子縁組の儀式を参照 p. 61)

Noⁿ'be'ze—黄色い鉤爪 ワシにちなんだもの

Opxoⁿ'shibpe—エルクのはらわた

Ota'noⁿ—二つのものの間の空間 テントの間を過ぎていく戦士にちなんだもの

Othu'hawae—妬まじげな

Pahu'çka—白い髪の毛 ホワイトバッファローにちなんだもの

Pasu'—呼びかけ

Poⁿhon'gregahre—戦闘の名前 最初の敵を攻撃したもの

Sa'pekie—自分を黒く塗る

To'won'gaxe—村をつくるひと (O., Mon'thinkagaxe)

Tsesi'n'no'pe—バッファローの尻尾の飾り

Tsi'zhuhon'ka(2)—Hon'ga の家族 指導者の名前

Tsi'zhun'inkashi'ka—小さな Hon'ga の家族

Tsi'zhushi'ka—小さな家族

Tsi'zhutsae—Tsi'zhu 血族集団の古い名前

Tso'he—まゆをひそめるような奴 ニックネーム

Uki'sa—荒れ果てた (誰もいない村、あるいは、家のような) (O., In'shta'çunda)

Wakon'daokie—Wakon'da に話しかける (古い Omaha の名前—Mon'thinkagaxe)

Wathigron'ringe(2)—意志のない (O., Mon'thinkagaxe)

Watsa'non'shin—戦闘の名前 的を捕まえたもの

Wazhin'bpizhi—怒り

Wazhin'gasabpe—黒い鳥 (O., Mon'thinkagaxe)

Wazhin'hotse—灰色の鳥 鷹にちなんだもの (O., Tapa')

Wazhin'sabpe—注意深い備え

女性

Mi'ta'nga—やって来る、あるいは、新しい月 (O.)

Mi'ta'ngashi'ka—小さな新しい月

SINTSAGRE

男性

Ba'zo'ntsie—戦闘の名前

Bpa'htato'ni—大きな頭 バッファローの頭にちなんだもの

Bpa'ri'wawexta—戦闘の名前 Pawnee 族を攻撃する

Do'he'mo'ni—良い歩き手

Gahi'gashi—酋長ではない

Gka'wasabpeagthi—黒い馬に乗るもの

Gko'n'segaxri—戦闘の名前 Kansa 族を殺す者

Gko'n'sekibpa—戦闘の名前 Kansa 族との出会い

Gredo'n'mo'ni—歩いている鷹 (O., In'ke'çabe)

Ho'mo'ni—吼える人

Ho'e'go'n—戦闘の名前 戦士の功績にちなんだもの 功績は男を探すことでもたら
される

Hutha'wato'inte—戦闘の名前 ワシの輝きが空高く舞い上がる

In'dokawadainga—戦闘の名前 栄冠を勝ちえたことにちなんだもの

Mon'zeuno'zhi—鉄のワイシャツ (Ponca)

Ni'gka'sabegaxri—戦闘の名称 黒い男を殺した者
 Ni'ka^ontsewa—戦闘の名称 敵を殺した者
 Ni'koibroⁿ—人間の臭いがする (O^{,m} Tha'tada)
 Otha'hamoⁿⁱ—戦闘の名称 追従者 指導者に追従する者
 Shoⁿ'gkeihi—戦闘の名称 戦士が近づいた時に吼える犬にちなんだもの
 Tha'bthiⁿwaxri—三人を殺す
 Tsewa'huy—バッファローの骨
 Wa'bisuⁿtse—戦闘の名称 戦士が敵を地面に伏せさせる
 Wa'dashtae—戦闘の名称 敵を狩り出すために草に火をつけることにちなんだもの
 Wadoh'kie—戦闘の名称 頭皮を取ることにちなんだもの
 Wahoⁿ'gashi—いたずら好きな奴 ニックネーム
 Wa'iⁿnoⁿzhiⁿ—戦闘の名称 捕虜を捕まえておく
 Waki'ashke—狩猟に行き、。バッファローの肉を荷造りすることにちなんだもの
 Watse'wahe—戦闘の名称
 Waxriⁿ—ケチな奴 ニックネーム
 Wazha'kibpa—戦闘の名称 Wazha'zhe との出会いにちなんだもの
 We'iⁿgaxe—狩猟にちなんだもの 荷造りの紐を作ること
 83998° — 27 ETH —11—5

MI'KINⁿ WANONⁿ

男性



Be'ga'xazhi(pl. 12)—戦闘の名称 追い越される
 ことのない男 走ることになんだもの
 Bpahi'thagthiⁿ—見栄えの良い髪の毛
 Ho'thagthiⁿ—良い声
 Migkiⁿ'wadainga—風変わりな太陽の運行人
 Mi'hice—黄色い髪の毛 バッファローの子牛に
 ちなんだもの
 Mio'tamoⁿⁱ—正直な太陽、あるいは、月
 Shiⁿniça—狩猟の邪魔をすることにちなんだもの
 We'toⁿmoⁿⁱ—戦闘の名称 wetoⁿの歌を歌っ
 ている女にちなんだもの

Fig. 12. Kansa chief

KANSA 族^a

Kansa という名前は非常に古いものである。風に関連した儀式が、幾つかの同語系部族のなかでカンザの人たちのものであるように、この言葉は、何か風に関係した意味を持っているものと思われる。

男達の集団

次にかかげるような男集団の名前は、部族の分裂が起きていることや、彼等の伝統的な習慣や儀式が消えていることから、完璧なものではないし、また、その部族の円陣のなかでの夫々の集団の配列について十分な情報を与えてくれるものでもない。

得られた情報は、彼等の古い組織は、ほかの同語系部族のそれと非常によく似ていたものであったようで、部族は、二つの大きな分属からなりたっていて、そのうちの 1 つの Kansa の中の男集団の名前は、オセージ族、ポンカ族、オマハ族、そして、クワポー族の中にも見受けられている。得られた名前と、特徴は次のようなものである：

1. Mo'ni'ka (“大地”) この名前は、オセージ族の Mo'ni'kagaxe や、オマハ族の Mo'ni'kagaxe という言葉、これらはいずれも、“大地の創造者” という意味であるが、これに相当するものである。
2. Wazha'zhe この名前は、オセージ族の名前、ならびに、オセージ族のなかのある大きな血族集団の 1 つの名前から来たものである；ポンカ族のなかの集団の名前から来ている。
3. Ponca この名前は、オセージ族、ならびに、ポンカ族のある集団の名前から来ている。
4. Kansa この名前は、オマハ族のカンザ集団から来ている。
5. Wazhi'ga inikashikithe (wazhi'ga とは鳥；inikashikithe は、オマハ族の Inikashigai に相当する言葉で、彼等自身が、これとともに人間になったという意味がある一つまり、これは、ある共通の儀式を観察することで彼等自身が人間になったということである。) (Tha'tada の wazhi'ga という準分属を参照のこと p. 160.) こうした同語系の部族のなかでは鳥というのが儀式のなかでは象徴的なものであって、彼は、こうした集団がある種の鳥に関連した儀式を執り行うときには、タブーとなっている。
6. Te inikashikithe (te 、バッファロー) バッファローの儀式は、これら五つの同語系部族の間では、共通のものである。

a カンザス族の人たちのうち、300 人足らずの人たちが現在でも残っている；彼らは、北部オクラホマに居住している。彼等の土地は、オセージ族の土地に隣接したところである。彼らもやはり、白人達が彼等の故郷の村に来たときにそこから強制的に退去させられた。そして、彼等の土地の合衆国への売却は 1825 年に始った。そして、その後の明け渡しも 1846 年に起こり、さらに 1859 年、1862 年と続いた。1872 年には、彼等の現在の保護居留区がオセージ族から購入された。クワポー族のように、カンザ族がそれほど減少しなかったものの、彼等は自分たちの伝統的な部族の社会を維持することは出来なかった：昔からの慣習や儀式を使わなかったことにより、人々の記憶から沢山のものが消えてなくなってしまったけれども、部族の先祖達から引き継がれた確かな知識は、おそらく、今もなお蘇ることができるだろう。(カンザ族の酋長の肖像画が pl. 16 ならびに pl. 12 に示されている。)



KANSA CHIEF

7. O'pxeⁿ inikashikithe (o'pxoⁿ エルク) エルクという名前をもつ集団は、オセージ族、クワポー族のなかにあり、オマハ族の場合には、エルクは、We'zhinshte 集団のタブーとなっている。
8. Hoⁿ (夜) この名前は、集団の名前としてオセージ族のなかから来たものである。
9. Ho'gashiⁿga (“小 Ho'ga”) この名前は、オセージ族、ならびに、クワポー族のもので、オマハ族、ならびに、オセージ族のなかの Ho'ga という名前から来ている。
10. Ho'gatoⁿga (“大 Ho'ga”) この名前もクワポー族から来たものである。
11. Tsedu'ga (“雄パツファロー”) この名前もまた、オセージ部族のものである。
12. Tsi'zhu washtage (washtage 素直な、友好的な) Tsi'zhu は、オセージ族のなかの大きな集団の名前で、Tsi'zhu washtage というのは、その集団のなかの平和を取り持つ人の名前である。



Fig. 13 Quapaw の男

クワポー 族^a

クワポーの言葉の由来はすでに説明したとおりである。(p. 36)

血族集団

この部族の血族集団に関わる決定的な情報を得ることはとても困難なことであった。この人たちは、すでに分裂してしまっていたので、疑問に対する答えは、いつも決まって、“すべて、もうないよ。そんなものはとっくの昔に無くなってしまったさ！”といううんざりするようなくびを横に振るものだった。この集団の断片的なリストを手にすることが

a クアポー族の子孫は(数で 100 人にも満たないが)、オクラホマ州の北部に住んでいる。(fig. 13.14 参照) 白人が最初に彼らに会った時には、彼らはオセージの南に住んで居た。16 世紀に、南から簡単に入って来た初期のフランス人やスペイン人の取引商人と、次々に接触するようになった。ルイジアナ買収の後、移住や、入植が奨励されて、彼らの土地すぐに必要になった。1818 年になり、彼らは、アーカンソー川とウィチタ川の南の地域を手に入れるという協約を受け入れ、アーカンソー川、カナディアン川と、レッド川に挟まれた地域を合衆国政府に売却した。この保護居留区は、彼らが現在住んで居るもっと狭い地域に退くという形で放棄された。彼等の浮き沈みは、彼ら自身の立場を守るといった形となったが、そのために、彼らのかつての社会の状況を正確に知ることができなくなってしまった。ここでは、ただ、断片的に集められたものが、幸運にも彼等の古い部族の形態や儀式を保存していた同語族系の人々から得られた知識と一緒にまとめられている。

できた。次に掲げたものの幾つかは、おそらく、準集団のものであると思われる。この部族にはふたつの集団があったが、しかし、部族のなかでの役割がどんな分配であったのかは、到底知るよしもない。

1. Hoⁿgatoⁿga --- Big Hoⁿga
2. Hoⁿgazhiⁿga ---- Little Hoⁿga

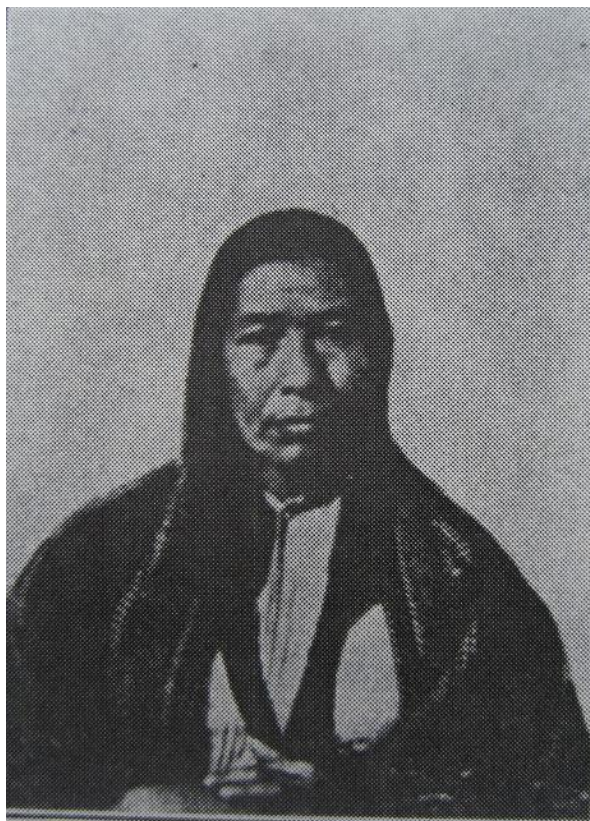


Fig. 14 Quapaw の女

3. Wazhiⁿga inikashiha (wazhiⁿga, 鳥 ; inikashiha, それとともに自分たち自身が人間になったという意味、たとえば、鳥が象徴であるような儀式により)

4. Teⁿikashiha (te, バッファロー)

5. Oⁿpoⁿ inikashiha (oⁿpoⁿ, エルク)

6. Huⁿikashiha (hu, 魚)

7. Keⁿikashiha (ke, 亀)

8. Naⁿpaⁿta - 鹿

9. Waⁿsa inikashiha (wasa 黒熊)

10. Moⁿchuⁿ inikashiha (moⁿchu, グリズリー)

11. Mihaⁿke nikashiha (mihaⁿke, 星)

12. Peⁿtoⁿ inikashiha (petoⁿ 鍋鶴)

13. Miⁿikashiha (mi, 太陽)

14. Wakoⁿta inikashiha --- 雷

オマハ族の同語系族に非常に近い四つの部族についての、つぎのような簡潔な説明が、以下に述べたような理由により与えられている：

まず、次のようなこの部族についての説明からも明らかになるように、これは一般的なことではあるが、オマハ族の間で、際立って展開されている部族の組織の風変わりな特徴のいくつかを示していること。

次に、部族が独立した組織となっていた過程に光を当てたり、何故、その夫々が異なった発展の様相を呈していたかと理由をうんだりしがちな同語系の集団についての注意深い研究が必要であることの重要性を示唆していること。

オマハ族、ならびに、その周りの四つの同語系の部族のなかには、部族の円陣の二つの配列や；戦闘に関係したような儀式、そして、戦闘での榮譽の授与などといった、それぞれに関係した機能といったような、組織のなかでの共通の概念を示しているある種の確たる特徴が見られる。子どもの名前を付けるときの儀式とか、与えられた名前の序列を付けるときの儀式、そして、生命の誕生は、死に関わっているような習慣のように、男の生涯の運命に直接影響を及ぼすと信じられていたこうした、宇宙の力の認識に対する宗教的な儀式のなかにも共通した形式があるようにも思われる。オマハ族についての物語が語ら

れるに従い、そして、詳細なところにおいては多少の違いは見られたにしても、そして、それらの違いもまた、類似性と同じように、きわめて示唆に富んだものであるが、その目的における類似性をみることができる同語系部族の間での慣習についての議論がなされるにつれ、こうした部族の間での類似性がだんだん明らかになるであろう。^a

^a オセージ族についての先に述べた簡単な説明がされて以来、この部族にかんする民俗学的な研究が *American Ethnology* 学会のために Francis La Flesche により進められた。その研究の結果として、継続的な注目の目が、オセージ族とかオマハ族などが属していた同語系集団の部族間の関係に向けられたものと思われる。